

桜井市

平成24年度国庫補助による 発掘調査報告書

吉備遺跡第16次調査

脇本遺跡第19次調査

纏向遺跡第175次調査

小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳測量調査

2014. 3. 19

桜井市教育委員会

桜井市

平成24年度国庫補助による 発掘調査報告書

2014. 3. 19

桜井市教育委員会

序

私達の桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域には山地より流れ出る粟原川、寺川、初瀬川、巻向川等の清流を集めた大和川がほぼ東西に横断し、この地を生きる多くの人々に限りない豊かさを与え続けています。

桜井市内で過去の営みを示すものとして、大和川の北側は芝遺跡、纏向遺跡や箸墓古墳、纏向石塚古墳をはじめとする纏向古墳群、南ではメスリ山古墳、桜井茶臼山古墳、上之宮遺跡、大福遺跡、吉備池廃寺など、全国的にも貴重な文化遺産が多く存在しています。これらの遺跡はこれまでの数々の発掘調査の積み重ねによって日本の歴史を塗り替える多くの事実を私たちに提供してくれています。

桜井市ではこのような遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成24年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち吉備遺跡第16次調査、脇本遺跡第19次調査、纏向遺跡第175次調査のほか、平成23年度に実施した小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳の測量調査の成果をおさめております。本報告によって貴重な歴史遺産に対する理解と愛着を深めていただき、調査した資料が広く活用されることとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして協力していただいた地主及び地元協力者の方々、指導・助言を頂いた多くの関係諸機関の方々、また、酷暑、極寒のなか作業に従事していただいた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力していただいた整理員の方々に深く御礼を申し上げ、序の言葉にかえさせていただきます。

平成26年 3月19日

桜井市教育委員会

教育長 石田 泰敏

例 言

1. 本書は平成24年度国庫補助事業として桜井市教育委員会が実施した市内遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。本報告書では、吉備遺跡第16次調査、脇本遺跡第19次調査、纏向遺跡第175次調査の3調査のほか、平成23年度に実施した小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳における測量調査の成果を掲載している。
2. 調査主体：桜井市教育委員会
教育長 雀部克英、事務局長 清水孝夫、事務局次長（文化財課長兼務）竹田勝彦、
桜井市纏向学研究センター所長 寺澤薫、
文化財係長 井前貴雄、調査研究係長 橋本輝彦、主任 松宮昌樹、福辻淳、丹羽恵二、
技師補 森暢郎
臨時職員 木場佳子、武田雄志、杉山真由美、西岡恵美
3. 調査担当者 森暢郎、杉山真由美
4. 調査補助員：堂浦千景、小島宏貴、中尾美貴子（立命館大学）、広瀬侑紀（京都橘大学）、
神所尚暉（奈良大学）、栗原卓志（同）、高橋直大（同）、太田泰平（帝塚山大学）
5. 調査作業員：井上久幹、上田猛、北村勝弘、田村則佳、吉岡靖夫、吉田友侖、高見淳、
中西智子、澤田巳喜雄、甲谷郷美、南幸弘、森貞之、北島弘
6. 整理作業及び報告書作成：上記補助員及び嶋岡由美、河合陽子、吉川晴美、太田久仁子、
小松令子、井ノ本奈津子
7. 現地調査及び遺物整理に関して以下の機関、団体、個人の方々からさまざまなご指導、ご教示を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）
井上主税（奈良県立橿原考古学研究所）、岡田雅彦（同）
8. 本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。編集は杉山がおこなった。
9. 本書における方位、座標は世界測地系によるものを示す。
10. 本書記載の遺物は、土師質のもの－白抜き、須恵質のもの－黒塗り、瓦質・瓦－網目、金属－白抜きとした。
11. 図版の遺物番号は、該当する各節の図の遺物番号に該当する。
12. 出土遺物をはじめ、調査記録の一切は桜井市教育委員会で保管している。活用されたい。

目 次

卷頭図版

序

例言

目次

表・挿図・図版目次

第1章 平成24年度国庫補助による発掘調査…………… 1

第2章 発掘調査の成果

第1節 吉備遺跡第16次発掘調査報告…………… 3

第2節 脇本遺跡第19次発掘調査報告…………… 7

第3節 纏向遺跡第175次発掘調査報告…………… 20

第4節 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳測量調査報告…………… 27

図版

抄録

表 目 次

表 1	平成24年度国庫補助による発掘調査一覧	2
表 2	出土遺物一覧 (吉備遺跡第16次調査)	6
表 3	出土遺物一覧 (脇本遺跡第19次調査)	17~19
表 4	土層注記一覧 (纏向遺跡第175次調査)	23
表 5	出土土器一覧 (纏向遺跡第175次調査)	26

挿 図 目 次

図 1	桜井市の位置	1
図 2	平成24年度国庫補助による調査位置 (S= 1 /40000)	2
図 3	吉備遺跡第16次調査位置図 (S= 1 /5000)	3
図 4	調査区 平面・断面図 (S= 1 /60)	4
図 5	出土遺物実測図 (S= 1 / 3)	5
図 6	脇本遺跡第19次調査位置図 (S= 1 /2500)	7
図 7	調査区 平面・断面図 (S= 1 /80)	8
図 8	第 2 遺構面・第 3 遺構面平面図 (S= 1 /80)	9
図 9	SX-303 遺物・礫検出状況及び遺構断面図 (S= 1 /40)	9
図10	第 1 遺構面遺構断面図 (S= 1 /40)	10
図11	第 2 遺構面遺構断面図 (S= 1 /40)	10
図12	SX-104 遺物出土状況及び遺構断面図 (S= 1 /60)	11
図13	出土遺物 1 (S=1/3)	13
図14	出土遺物 2 (S=1/3)	14
図15	出土遺物 3 (28 : S= 1 / 6、29~32 : S=1/3、33・34 : S= 1 / 2)	15
図16	これまでの調査地の位置と地形	20
図17	調査区の位置 (S= 1 /300)	21
図18	調査区 平面・断面図 (S= 1 /50)	22
図19	東区の遺構断面図 (S= 1 /40)	23
図20	調査区出土土器 (S= 1 / 3)	25
図21	古墳の位置 (S=1/4000)	27
図22	天理大学歴史研究会による測量 (S= 1 /1000)	28
図23	野淵龍潜による報告	29

図24 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳平面図 (S=1/800).....	30
図25 墳丘の復元図 (S=1/800).....	31

図 版 目 次

巻頭図版 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳全景 (北西から) 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳 (上が北)	図版7 纏向遺跡第175次調査 (2) 東区遺構検出状況① (北西から) 東区遺構検出状況② (南西から) 東区全景 (北西から)
図版1 吉備遺跡第16次調査 1 トレンチ (北東から) 2 トレンチ (北東から) 出土土器	図版8 纏向遺跡第175次調査 (3) 東区南壁 (北西から) 西区作業風景 第176次調査区1区との段差(南から)
図版2 脇本遺跡第19次調査 (1) 第1遺構面遺構検出状況 (西から) トレンチ南壁 (東から) SX-104断面 (西から)	図版9 纏向遺跡第175次調査 (4) SP-1001 (南東から) SP-1002 (北西から) SP-1003 (北から) SP-1004 (北から) SP-1005 (北から) SP-1006 (北から) SK-1001 (北から) SP-1002 (南から)
図版3 脇本遺跡第19次調査 (2) 第1遺構面遺構完掘状況 (東から) SX-101遺構完掘状況 (南から) SX-303遺物・礫検出状況 (北から)	図版10 纏向遺跡第175次調査 (5) 調査区出土土器
図版4 脇本遺跡第19次調査 (3) SP-110出土遺物 SX-104出土遺物 包含層出土の遺物①	図版11 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳全景 初釣り池周辺の石群
図版5 脇本遺跡第19次調査 (4) 包含層出土の遺物② 包含層出土の遺物③	
図版6 纏向遺跡第175次調査 (1) 西区全景 (北東から) 西区南壁 (北東から) 西区南壁拡張部 (北から)	



小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳全景（北西から）



小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳（上が北）

第1章 平成24年度国庫補助による発掘調査

1. 桜井市の位置と環境

桜井市は、奈良県北部に位置する人口約6万人、面積98.93km²の都市である。市域は、奈良盆地の東南部と大和高原ならびに宇陀山地・吉野山地の一部に及ぶ。市の平地部は大和川の本流である初瀬川とその支流である寺川をはじめとした河川の堆積からなり、古くから農耕地として利用されてきた。北は天理市と奈良市、西は田原本町と橿原市、東は宇陀市、南は明日香村と吉野町と隣り合っている。市内には複数の古道が通っており、古代から交通の要衝であったことが、文化財が多く残るといふ桜井市の環境を形成させた要因の一つであろう。現代でも国道や鉄道で奈良市内や大阪と通じており、高度経済成長期以降は徐々に都市化が進んできている。



図1 桜井市の位置

桜井市の範囲内で人の活動が活発なものとなったのは弥生時代以降であり、銅鐸が発見された大福遺跡や絵画土器が出土した芝遺跡など、主に平地部に集落遺跡が形成された。古墳時代では、市の北端で箸墓古墳を始めとした纏向古墳群や纏向遺跡が存在する。平地部と山地の境界付近には、古墳時代前期には桜井茶白山古墳、メスリ山古墳等大型前方後円墳が、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては赤坂天王山古墳や文殊院西古墳などといった古墳が数多く造られた。また、山田寺や安倍寺、百濟大寺と目される吉備池廃寺などの古代寺院が築かれたほか、園地や大型建物が築かれた上之宮遺跡などがある。以上から、この地域が大王家や有力氏族と強い関係を持っていたことが想定され、国家形成の初期において重要な位置にあった地域であるといえる。

2. 平成24年度の発掘調査

平成24年度に実施した国庫補助による発掘調査は5件である(表1)。このうち、吉備遺跡第16次調査と脇本遺跡第19次調査、纏向遺跡第175次調査は個人住宅建設等に伴う発掘調査であり、それ以外の2件の調査は範囲確認調査であった。本書では、平成24年度実施の調査のうち、吉備遺跡第16次調査、脇本遺跡第19次調査、纏向遺跡第175次調査及び、平成23年度に実施された小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳の測量調査の成果について報告する。

表1 平成24年度国庫補助による発掘調査一覧

地図No.	調査名称	所在地	期間	面積	主な遺構・遺物	担当者
1	吉備遺跡第16次調査	吉備481番4ほか	5月18日～5月23日	21㎡	素掘溝、土器	杉山
2	脇本遺跡第19次調査	黒崎622番1	8月27日～10月12日	62㎡	ピット、土坑、土器	杉山
3	纏向遺跡第175次調査	辻45番5	9月6日～24日	27.5㎡	ピット、土器	森
4	纏向遺跡第176次調査	辻45番1ほか	11月14日～3月6日	472.5㎡	井戸、ピット、土坑、 区画溝、土器、木製品、石製品	森
5	茅原大墓古墳第6次調査	茅原719	12月7日～2月23日	97㎡	渡土堤状遺構、埴輪	福辻
6	小川塚西古墳・小川塚東古墳・ サシコマ古墳（測量調査）	巻野内、菅中地内	平成24年 3月27日～28日	—	—	森



図2 平成24年度国庫補助による調査位置（S=1/40000）

第2章 発掘調査の成果

第1節 吉備遺跡第16次発掘調査報告

1. はじめに

吉備遺跡第16次発掘調査は、桜井市大字吉備481番4、493番1、493番2、496番4、497番1における、個人住宅の建築工事に先立った発掘調査である。調査面積は合計して21㎡で、平成24年5月18日から5月23日まで調査を実施した。

吉備遺跡は桜井市の南西部に位置し、過去の調査では、第1次調査で弥生時代後期の自然流路、第2、3次調査で藤原京期の掘立柱建物跡や板枿井戸など、第9次調査では古墳時代前期の土坑が、近年の15次調査でも枿板井戸が確認されている。周囲には、百済大寺とされる吉備池廃寺や、藤原京期の道路遺構が見つかった黒田池遺跡、横内遺跡等がある。

今回の調査地の周辺は、過去に地山を削平して整地されているので、遺跡の残存状況は悪いことが予想される。第2、3次の調査地にごく近いため、遺跡が残っているとすれば、藤原京期の遺構の存在が期待される。

2. 調査の方法と基本層序

(1) 調査の方法

敷地内の西側に沿うように南北に1本、南側に沿うように東西に1本、7m×15mのトレンチを入れた。北側を1トレンチ、南側を2トレンチとした。機械掘削で表土を除去した結果、2トレンチの東方では地山がやや深く潜っており、削平を受けていない可能性が高いと判断できた。よって、遺構

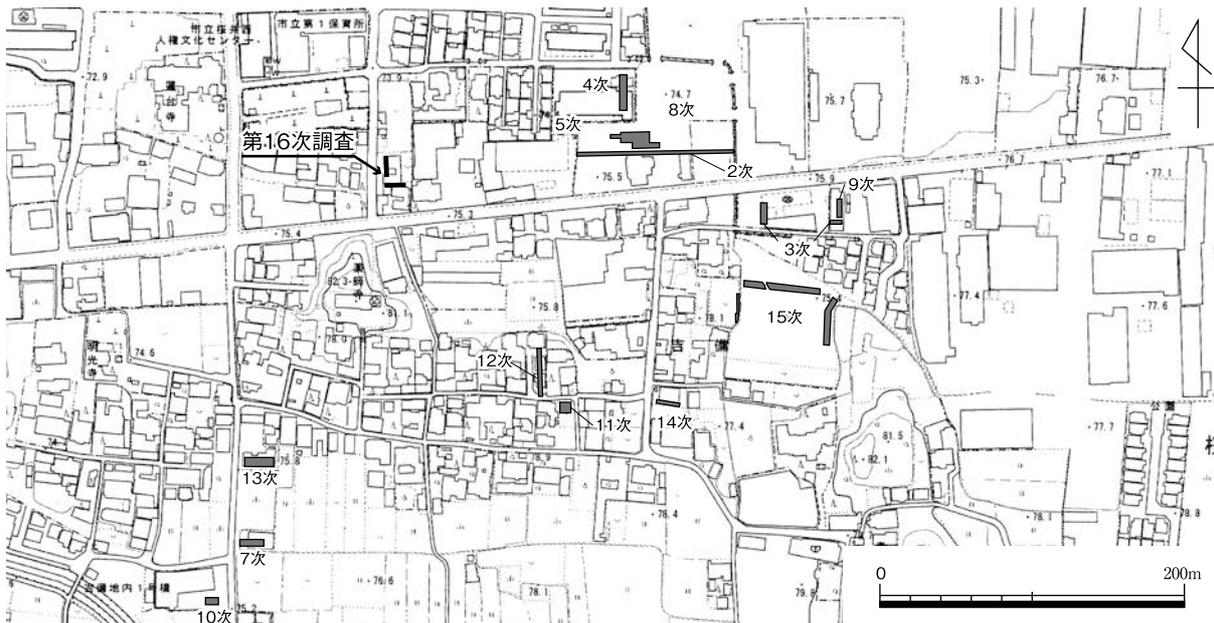


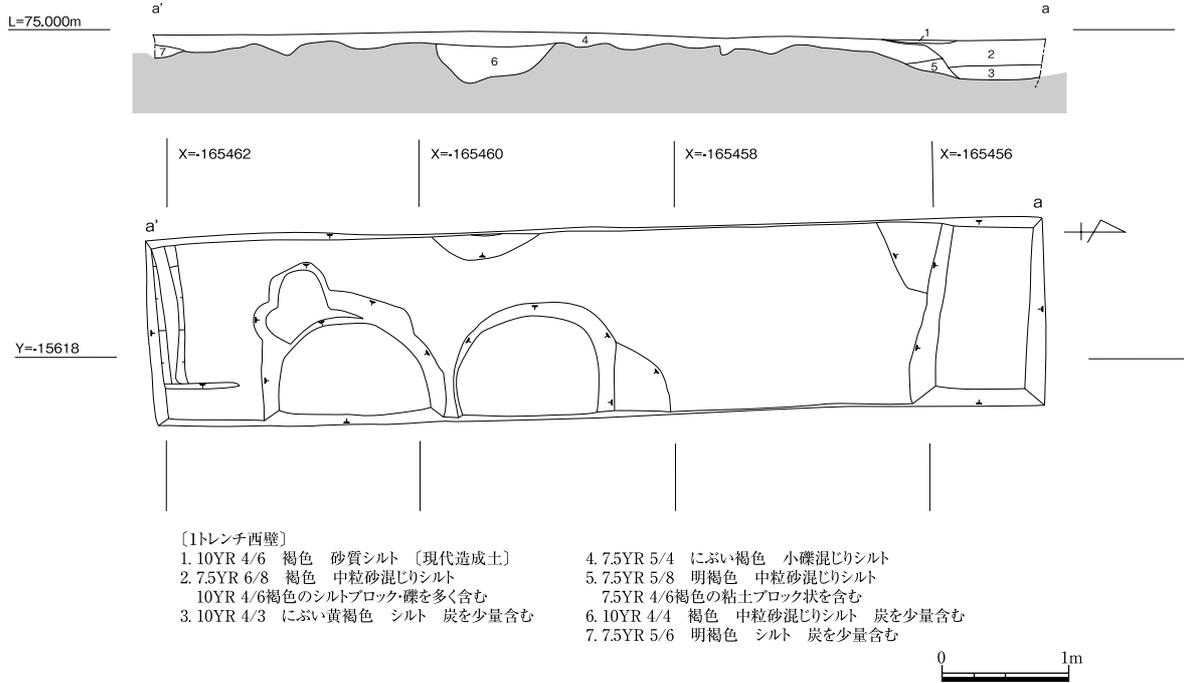
図3 吉備遺跡第16次調査位置図 (S = 1/5000)

の掘削は2トレンチから開始した。

(2) 基本層序

表土は現代の造成土で、標高75m~74.8mである。その下はすぐ岩盤が風化した地山に到達する。調査区南東部付近のみ、表土と地山の間、標高74.8m~74.6mに褐色のシルト層が存在する。

1 トレンチ



2 トレンチ

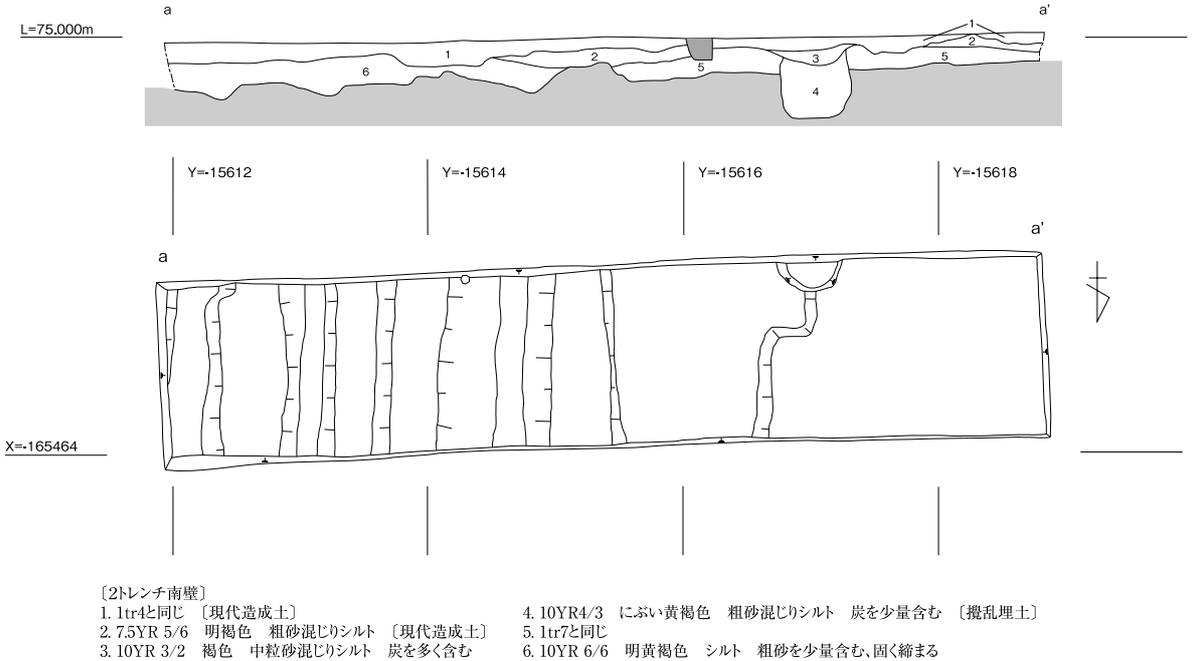


図4 調査区 平面・断面図 (S = 1/60)

3. 検出遺構

1 トレンチ 機械掘削による遺構面検出段階からコンクリートの残骸が露出しているような近現代の攪乱坑が2つあった。トレンチの南側には、攪乱坑のものとは異なる埋土を持つ土坑2つを検出したが、掘削した結果この土坑も近現代の攪乱坑と判断された。1 トレンチでは、時期的にそれらを遡る遺構を見つけることはできなかったが、播鉢（図5-5）をはじめとした陶器片や土師器片が微量ながら存在した。後世の削平や攪乱により、近世以前の遺構が破壊されていると判断できよう。

2 トレンチ 西半分では目立つ遺構は検出されなかった。東半分に展開していたシルト層を一段下げると、トレンチを南北に横断する素掘溝が3条（SD-101~103）平行して確認できた。規模は幅50~100cm、深さ10~20cm程であった。シルト層内からは、須恵器長頸壺口縁部（図5-1）や土師器甕口縁部（図5-2）のほか、羽釜や瓦器の破片が少量出土した。一方、トレンチの中央から南西端には、地山が一段下がる箇所が見られたが、僅かな土師器片、瓦片、陶器片などを含むだけで、深さも数cmとごく浅いものであり遺構であるかどうかは判断がつかなかった。また、時期の特定しうる遺物も見られなかった。

4. 遺物

出土遺物は土器片を中心に、およそコンテナ1箱分であった。遺物は多くが細かな破片であり、凶化に耐えるものは僅少であった。（5）は1 トレンチ、（1~4）は2 トレンチの出土である。（1,2）は、シルト層内から出土した。（1）は須恵器長頸壺の口縁と考えられる。（2）は土師器甕の口縁と考えられる。強い横ナデにより、口縁部を作り出している。（3）はSD-101より出土した須恵器片で、甕の体部片であると思われる。外面に格子目の叩きと内面に同心円状の当て具の痕が残る。（4）は機械掘削時に出土した須恵器甕の体部片で、外面には格子目叩きの痕跡とカキメが残る。

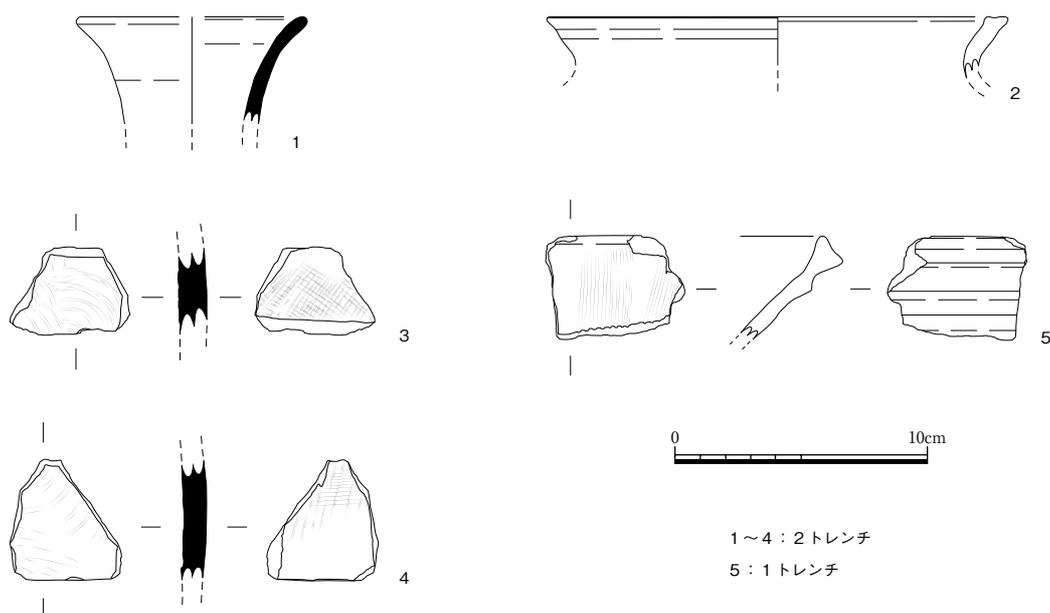


図5 出土遺物実測図（S=1/3）

5. まとめ

調査を通して、調査地の北側付近は地山が削平されていたが、南東付近から東に向かって地山が低くなり、遺構面が一部残存していたことが確認された。2トレンチでは古代～中世と推測される素掘溝を検出した。(杉山)

〈参考文献〉

清水真一1986『吉備遺跡岡崎地区発掘調査概報』桜井市教育委員会

清水真一1987『吉備遺跡法華堂地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会

清水真一1988『吉備遺跡今北地区発掘調査概報』桜井市教育委員会

清水真一1998『桜井市内埋蔵文化財1997年度発掘調査報告書2』(財)桜井市文化財協会

表2 出土遺物一覧(吉備遺跡第16次調査)

報告番号	地区	器種	胎土	焼成	残存率	法量 (cm)	調整など	色調
	層位・遺構							
図5-1	2tr 包含層	壺 (須恵器)	密	良好	-	残存高:4.2	口縁部内外とも横ナデ	内面:10YR 6/1 灰 外面:10YR 5/1 灰 断面:7.5YR 7/1 灰白
図5-2	2tr 包含層	甕 (土師器)	やや粗	良好	16%	口径:18.1 残存高:1.9	口縁部内外とも横ナデ	内・外面:10YR 8/4 淡黄橙 断面:N 4/ 灰
図5-3	2tr SD-101	甕 (須恵器)	やや粗	やや軟質	-	-	外面に格子目叩き 内面に同心円状当て具痕	内面:N6/ 灰 外面:10Y7/1灰白
図5-4	2tr 機械掘削	甕 (須恵器)	やや粗	やや軟質	-	-	外面に格子目叩き、カキメ 内面に同心円状当て具痕	5Y7/1灰白~5Y7/3灰白
図5-5	1tr SK-107	播鉢	粗	良好	-	残存高:4.1	口縁部内外とも横ナデ 内面に櫛目	内・外面:10R4/1暗赤灰 断面:7.5YR8/4浅黄橙

第2節 脇本遺跡第19次発掘調査報告

1. はじめに

脇本遺跡第19次発掘調査は、桜井市大字黒崎622-1における、農業用進入路の設置工事に先立って実施した発掘調査である。調査面積は約62㎡で、平成24年8月27日から10月12日まで調査を実施した。

脇本遺跡は、三輪山と外鎌山に挟まれた初瀬谷の西端部、初瀬川の北岸河岸段丘上に位置する、弥生時代から飛鳥時代を中心とした集落遺跡である。周囲には黒崎遺跡、城島遺跡があり、初瀬川を挟んで南側には外鎌山北麓古墳群が展開している。また、遺跡は伊勢街道沿いに立地しており、古くから交通の要衝であったことがわかる。近年の調査成果からは、5世紀後半～7世紀後半にあたる掘立柱建物や柵の跡が確認されており、雄略天皇の「泊瀬朝倉宮」や大来皇女の「泊瀬斎宮」が存在した可能性が指摘されている。その他にも弥生時代前期～中期初頭の「松菊里型住居」の発見や、弥生時代後期の青銅器製作の痕跡、古墳時代の玉作りの痕跡等の発見があり、遺跡の全継続期間を通して注目される遺跡である。

今回の調査区は、遺跡の東端から黒崎遺跡との境目に位置している。6世紀後半から7世紀後半とみられる建物跡や柵列を検出した第15次調査3区の北側に隣接しており、それらの続きの発見が期待された。

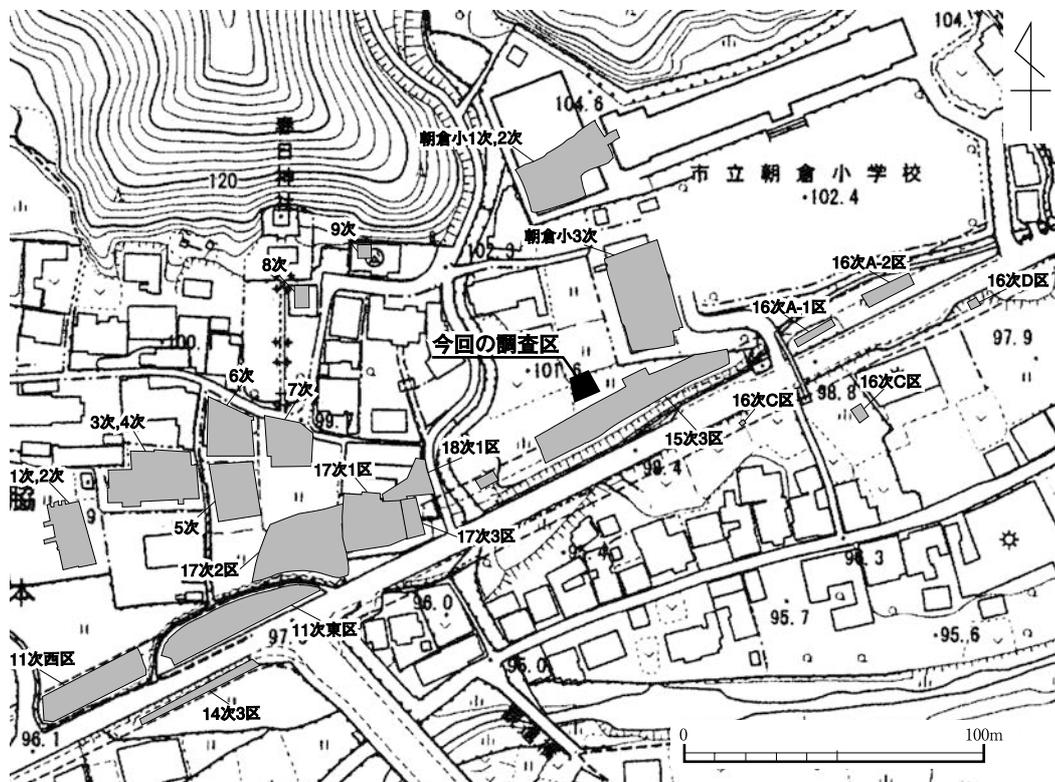
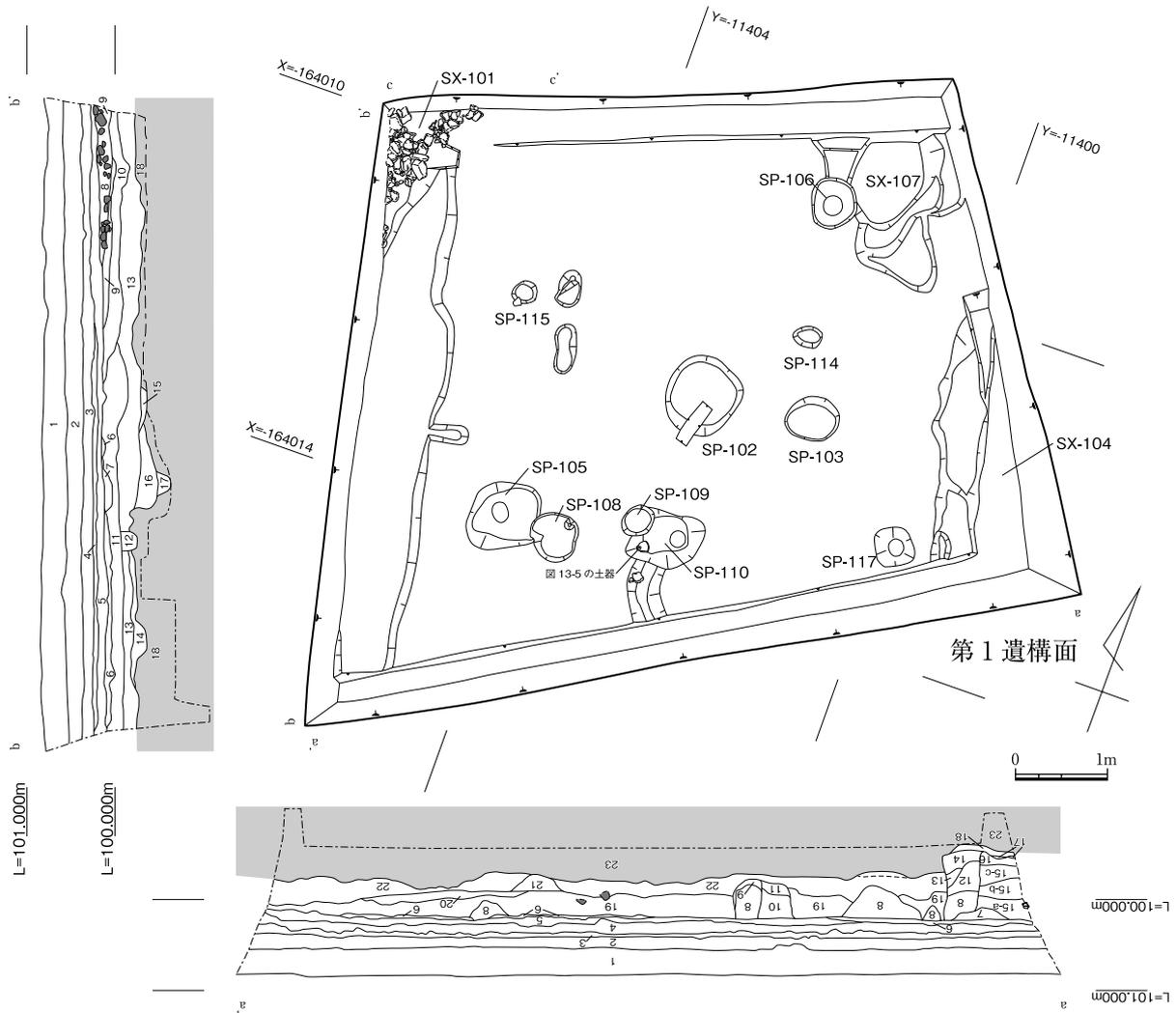


図6 脇本遺跡第19次調査位置図 (S = 1/2500)



第1遺構面

〔トレンチ南壁〕

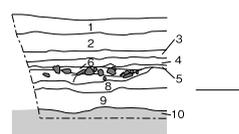
1. 5Y3/2 オリーブ黒 シルト 少量の小礫を含む〔現代耕作土〕
2. 5Y3/1 オリーブ黒 シルト 少量の小礫を含む〔旧耕作土〕
3. 7.5Y3/2 オリーブ黒 シルト 少量の小礫を含む〔水田床土〕
4. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト 多量の礫を含む(10YR4/4褐 シルトが上端に展開)
5. 5Y4/2 灰オリーブ シルト 多量の小礫を含む
6. 10YR5/6 黄褐 粗粒砂まじりシルト
7. 2.5Y3/2 黒褐 細粒砂まじりシルト 多量の5Y5/2灰オリーブのシルトブロック・炭・遺物・マンガンを含む〔SX-104埋土〕
8. 2.5Y3/2 黒褐 中粒砂まじりシルト 多量の小礫・遺物を、少量の礫を含む〔SX-104ほか遺構埋土〕
9. 7.5Y4/2 オリーブ灰 細粒砂
10. 2.5Y3/2 黒褐 中粒砂まじりシルト 2.5Y3/3暗オリーブ褐のブロックを含む
11. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘質シルト
12. 10YR4/1 褐灰 シルト 多量の小礫を、少量の遺物・炭を含む
13. 2.5Y3/2 黒褐 細粒砂 2.5Y5/2暗灰黄の細粒砂まじりシルトブロック・小礫・炭を含む
14. 2.5Y3/1 黒褐 中粒砂まじり粘質シルト 少量の10YR4/3こぶい黄褐の中粒砂まじりシルトブロック・遺物・炭・礫を含む
- 15-a. 2.5Y3/2 黒褐 細粒砂まじりシルト 多量の礫を含む・5Y5/2灰オリーブ粘質シルトブロック(マンガンを含む) 多量の遺物・炭を含む
- 15-b. 5Y5/2 灰オリーブ 粘質シルトブロック(マンガンを含む)が主体・2.5Y3/2黒褐 細粒砂まじりシルト 多量の遺物・炭を含む
- 15-c. 5Y5/2 灰オリーブ~2.5Y5/2暗灰黄 粘質シルトブロック(マンガンを含む)が主体・2.5Y3/2黒褐 細粒砂まじりシルト 多量の遺物・炭を含む
16. 2.5Y4/2 暗灰黄 粘質シルト 小礫・礫を含む
17. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト質粘土 細粒砂を含む
18. 2.5Y5/1 黄灰 細粒砂まじりシルト
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細粒砂まじりシルト〔遺構ベース層〕
20. 2.5Y4/2 暗灰黄 中粒砂まじりシルト 小礫を含む
21. 2.5Y4/2 暗灰黄 細粒砂 炭を少量含む〔SK-208埋土〕〔遺構ベース層〕
22. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト質細粒砂 少量の小礫・炭を含む
23. 2.5Y4/3 オリーブ褐 細粒砂まじりシルト〔遺構ベース層〕

〔トレンチ西壁〕

1. 南壁1と同じ
2. 南壁2と同じ
3. 南壁3と同じ
4. 南壁4と同じ
5. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗粒砂まじりシルト
6. 南壁6と同じ〔素掘埋土〕
7. 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト 多量の礫、遺物を含む
8. 2.5Y5/4 黄褐 中~粗粒砂 下端に厚い鉄分の層が形成〔SX-101埋土〕
9. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト 礫・遺物を含む
10. 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルト 小礫、鉄分を含む
11. 南壁19と同じ
- 12.〔SP-205埋土〕
13. 南壁22と同じ
14. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐 粘質細粒砂 少量の炭を含む
15. 2.5Y4/3 オリーブ褐 粘質シルト 多量の礫を含む
16. 2.5Y4/2 暗灰黄 小礫まじりシルト 多量の礫を含む
17. 2.5Y4/4 オリーブ褐 細~中粒砂まじりシルト 多量の礫を含む
18. 南壁23と同じ

L=101.0000m

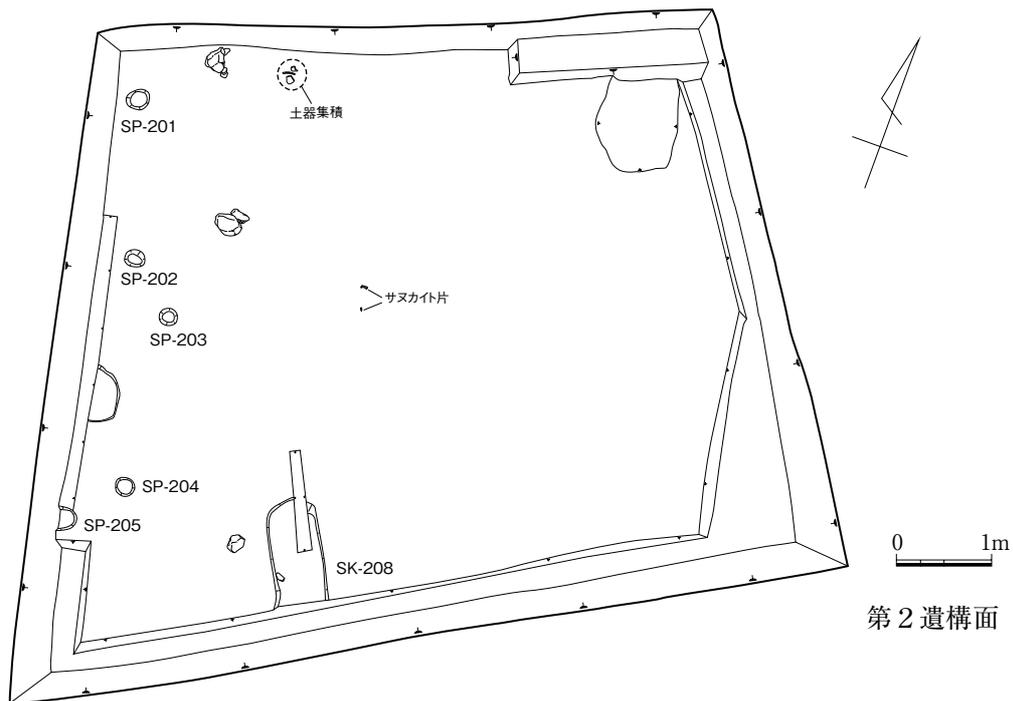
L=100.0000m



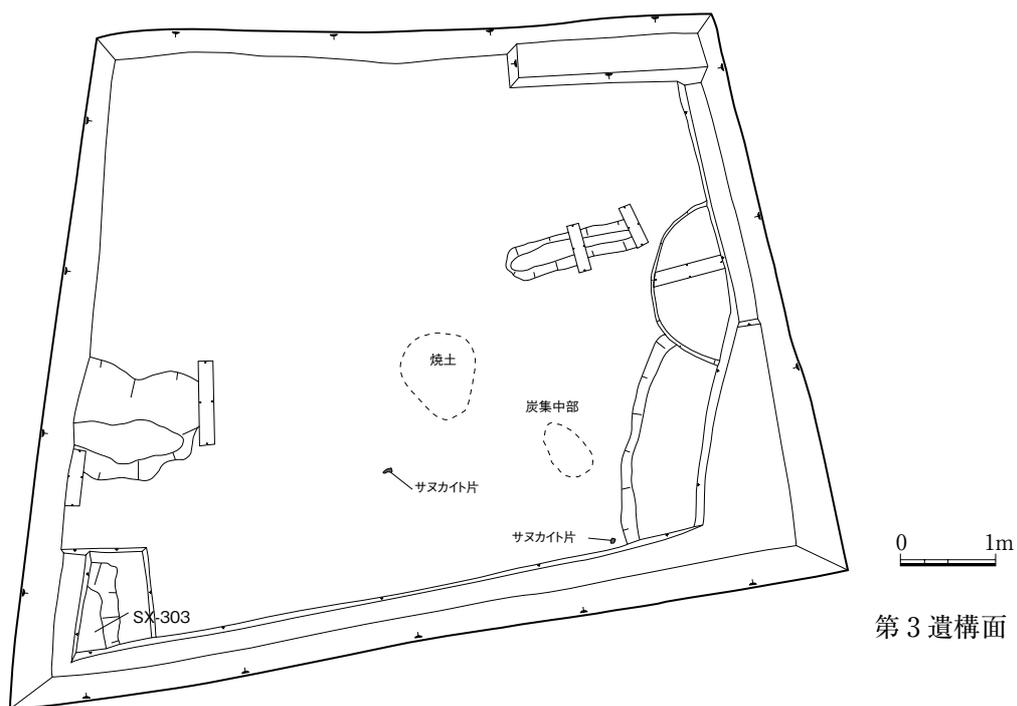
〔トレンチ北壁(SX-101付近)〕

1. 南壁1と同じ
2. 南壁2と同じ
3. 南壁3と同じ
4. 西壁5と同じ
5. 南壁6と同じ
6. 西壁8と同じ
7. 西壁9と同じ
8. 西壁10と同じ
9. 南壁22と同じ
10. 南壁23と同じ

図7 調査区 平面図・断面図 (S=1/80)



第2遺構面



第3遺構面

図8 第2遺構面・第3遺構面平面図 (S = 1/80)

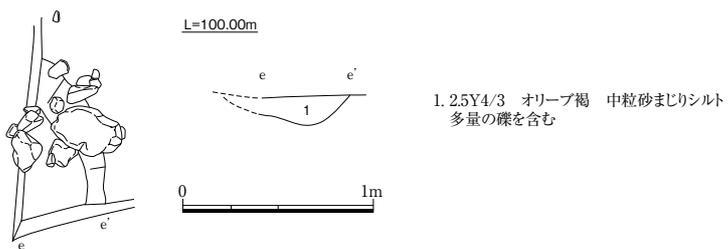


図9 SX-303 遺物・礫検出状況及び遺構断面図 (S = 1/40)

2. 調査の方法と層序

(1) 調査の方法

調査地内の、農業用進入路の真下に当たる部分を中心にトレンチを設定した。トレンチの規模は、南側の辺が8.4m、北側が7m、西側が6.8m、東側が5.7mで、台形の形状をとる。

最初、機械掘削で耕作土から床土までを除去し、平面精査以降の作業を人力で実施した。第1遺構面以下の段下げも手掘りで行った。遺構を検出したのは、各遺構ベース層上面（第1～3遺構面）の、計3面である。

(2) 各層位の状況

基本層序は、標高100.8m～100.3mに耕作土・旧耕作土・床土が広がり、標高100.3m～99.9m辺りまで整地土が展開する。標高100.1m以下に遺構ベース層が厚く堆積するが、南西部付近では標高97m半ばより下に、砂礫層が存在する可能性がある。なお、遺構ベース層は礫が殆ど混じらないシルト層で

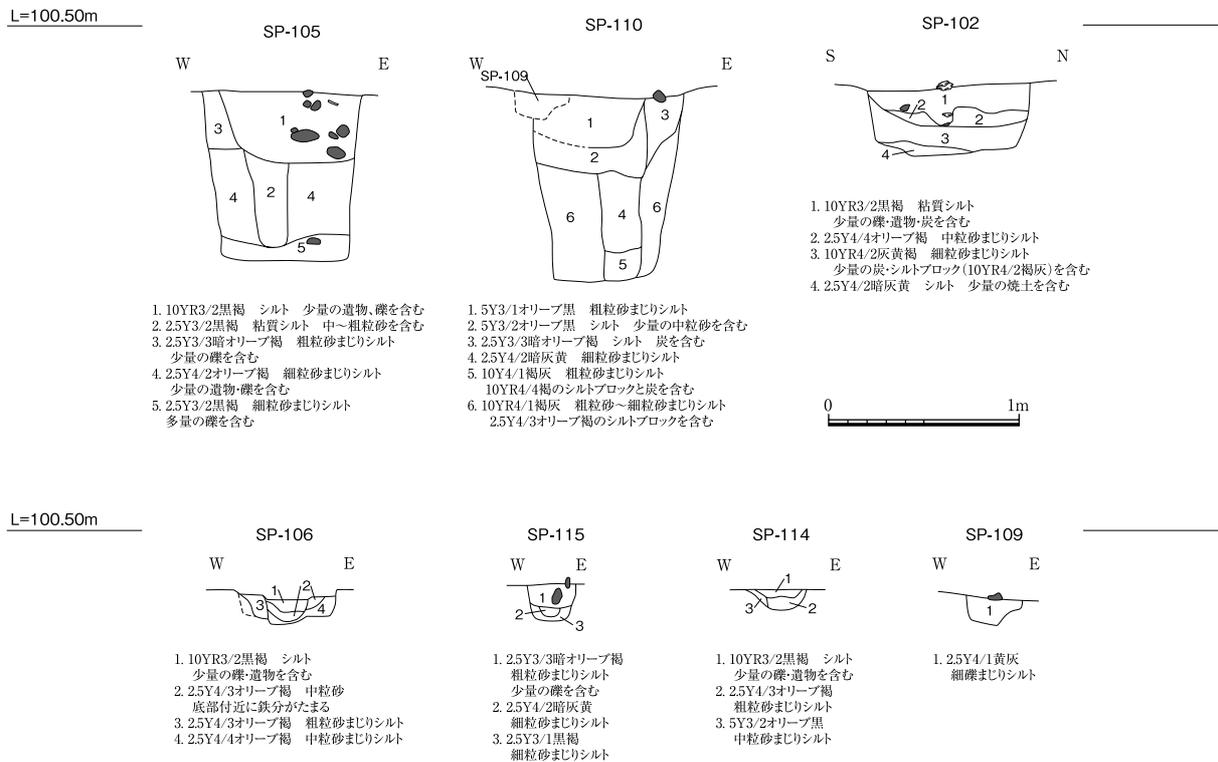


図10 第1遺構面遺構断面図 (S = 1/40)

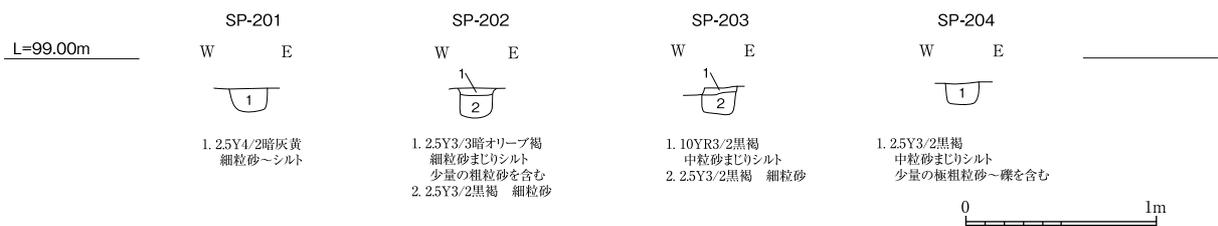


図11 第2遺構面遺構断面図 (S = 1/40)

ある。隣接地で行われた第15次調査では、今回の第一遺構面に相当する面で6～7世紀の遺構が見つっている。

3. 検出遺構

第1遺構面 第1遺構面では東西及び南北に展開する中世の素掘溝とともに、古墳時代中期頃の柱穴や土坑などが検出された。古墳時代中期頃と判断された遺構は、細かな遺物や炭を多量に含む黒褐色系の埋土であり、褐色系の小さなシルトブロックを含むことで概ね共通する。このような埋土を持つ遺構は人為的に埋め立てられたものと考えられる。

トレンチ南西部で検出されたSP-105・110は形態、規模、埋土の状況などから同一の築造物に属するものである可能性がある。いずれも、黒褐色の埋土は10～20cmほどでみられなくなり、それ以下は柱痕跡が残存し、その径はおよそ20cm強～30cm程であった。柱間寸法は1.96mである。底部付近には鉄分の塊とラミナのたわみが観察できた。黒褐色土の部分まで破壊が及んだものと想定できる。SP-110からは、残存率50%以上の土師器高杯の杯部が見つまっている。土器の時期は古墳時代前～中期頃と想定され、遺構の廃絶時期を示すものと考えられる。SP-115はトレンチ北西部で見つかった小規模な遺構である。深さ15cmを超えた辺りで柱痕を検出した。柱の径は10cm程である。SP-106はトレンチ北東部で見つかった比較的規模の小さな遺構である。深さは30cm足らずであるが、柱痕が残っていた。柱の径は20cm程であると推測される。この遺構の埋土は、他の遺構のものと異なること、黒褐色の埋土を持つ遺構を切っていることから、古墳時代の中期より新しい遺構である可能性がある。SP-115の続きになると考えられるピットは、トレンチ内では検出されなかった。SP-106は、15次調査で発見された柵列の続きになる可能性があるが、それより西では同規模のピットを検出しなかった。いずれも遺物は土師器や須恵器の小片が見つかるに留まり、詳細な時期については不明である。

SX-101は石組みの遺構で、その一部のみをトレンチ北西端で検出した。埋土が他の遺構と異なり、

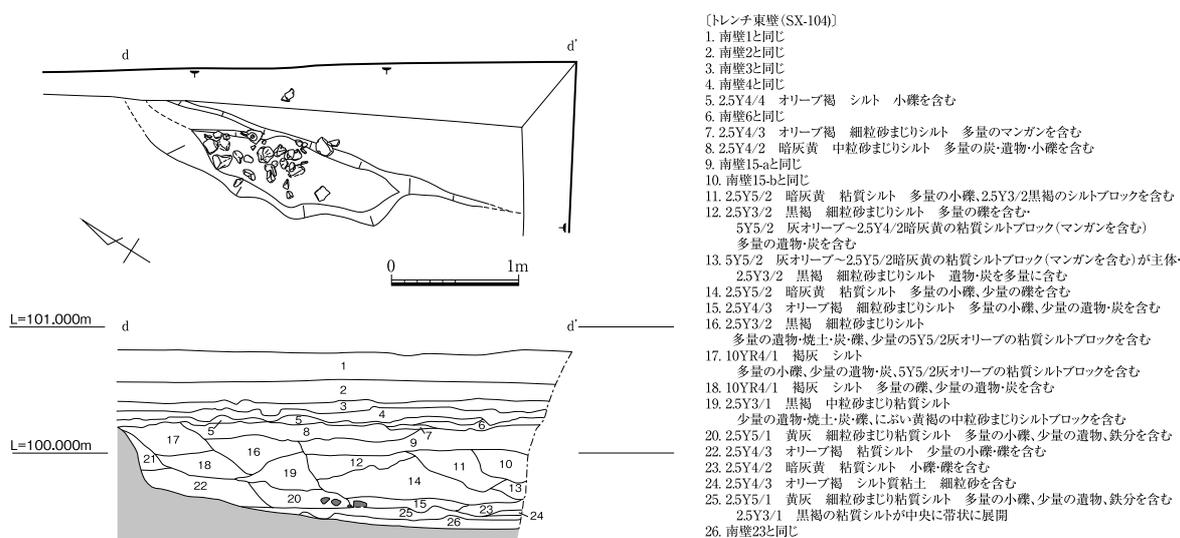


図12 SX-104遺物出土状況及び遺構断面図 (S=1/60)

明るい褐色系の砂を多分に含んでいる。また、鉄分が厚く堆積している層があることなどから、水が溜っていたような遺構である可能性がある。遺物は土師器及び須恵器の小片が多数出土しており、古墳時代中期より後の遺構であると考えられる。

SX-104は、トレンチ南東角で一部を検出した巨大な遺構である。遺構の西肩以外はトレンチ外に続いており、その全体像は不明である。全長は2m超、最大幅は1m超と想定される。深さは最大で1.2mの規模をもつ。遺構の肩寄りに遺物片等を多量に含んだ黒褐色土が展開し、その内側に褐色のブロック土と黒褐色土が混ざった状態で埋まっている。この様子から、少なくとも中央部分は人為的に埋め戻された様子が窺える。遺物は主に外側の黒褐色土の部分から、破片の状態の須恵器、土師器、製塩土器、鉄釘のほか、焼土がみつかった。遺物の時期は凡そ古墳時代中期～後期に帰属するものと判断されるが、遺構の埋まり方が特殊であるため、遺物の時期がそのまま遺構の埋没時期につながることは考えにくい。この遺構の正体については定かではないが、15次調査のSD-2の延長上に位置しており、その延長である可能性も想定される。

第2遺構面 第2遺構面では小規模なピット、不整形の土坑が複数検出された。SP-201～205はいずれも同程度の規模の柱穴であるが、配置が不規則である。これらのピットからは遺物が出土せず、詳細な時期を特定するには至らなかった。第1遺構面と第2遺構面を形成する包含層内からは、細かなサヌカイトの剥片が多数見つかっているが、遺構面上や遺構内に集中する箇所は見られなかった。また、縄文時代晩期の深鉢片も包含層中から多数出土した。

第3遺構面 第3遺構面では石が積まれた遺構、焼土、炭の集中部などが確認された。焼土は、トレンチのほぼ中央で検出されており、径30～40cmの範囲に、厚さ5cm以上で面的に形成されていた。また、そのすぐ東方では、炭が塊の状態で見つかっており、遺構同士の関連が想定される。SX-303は、トレンチの南西角で検出された土坑状の遺構で、10～15cm程度の礫や土器片がその中に見られた。中には、長軸36cm×短軸25cmの大きな礫も見られた。これらの石と石の間から、縄文時代晩期の深鉢の体部片が数点見つかっている。

4. 出土遺物

全体的にまとまった遺物の出土は見られなかった。第一遺構面では、細かく割れた土器が多く出土した。破片のため、確実な時期を示せるものは限られるが、土師器、須恵器のほか破片の状態の製塩土器が目立つ。

土器 図13(1～4)は、SP-105出土土器である。頸部に突帯の付く大型壺(2)や布留形甕の口縁(4)が、出土している。(6)はSP-108出土の土師器の有稜高杯である。表面にはハケメ調整が残るが、殆ど摩滅している。(7)はSP-110から出土した土師器高杯である。表面調整は摩滅のためほぼ不明である。器壁が厚めで、作りの粗雑さが感じられる。(10～21)はSX-104出土土器である。須恵器の無蓋高杯(12,13)は、いずれも坏部半ばに突線状のラインがあり、その下には櫛描文が施される。(13)の脚部には、長方形透かしがあり、3方向に透かし孔が穿たれていたものと想定され

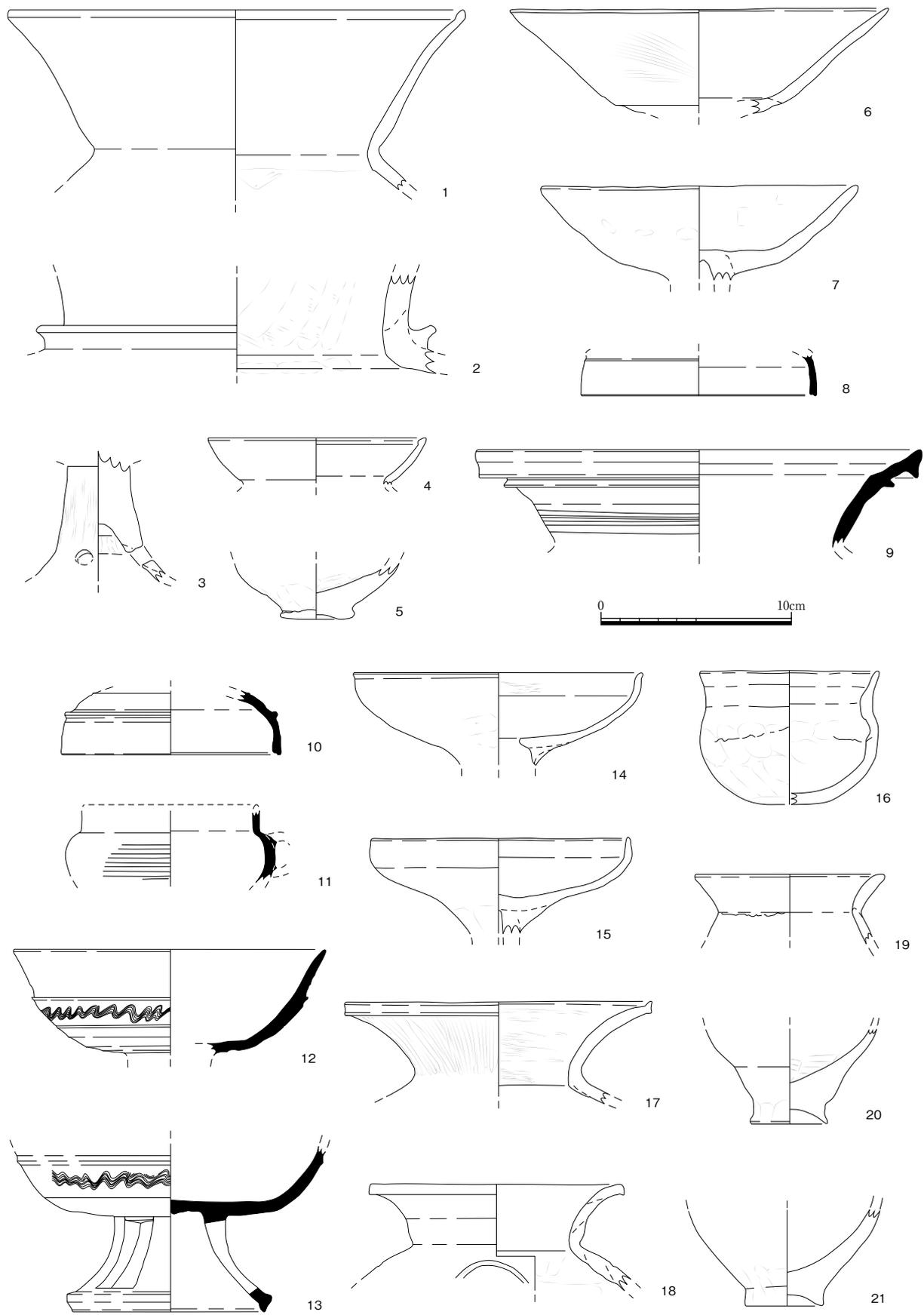


图13 出土遺物 1 (S=1/3)

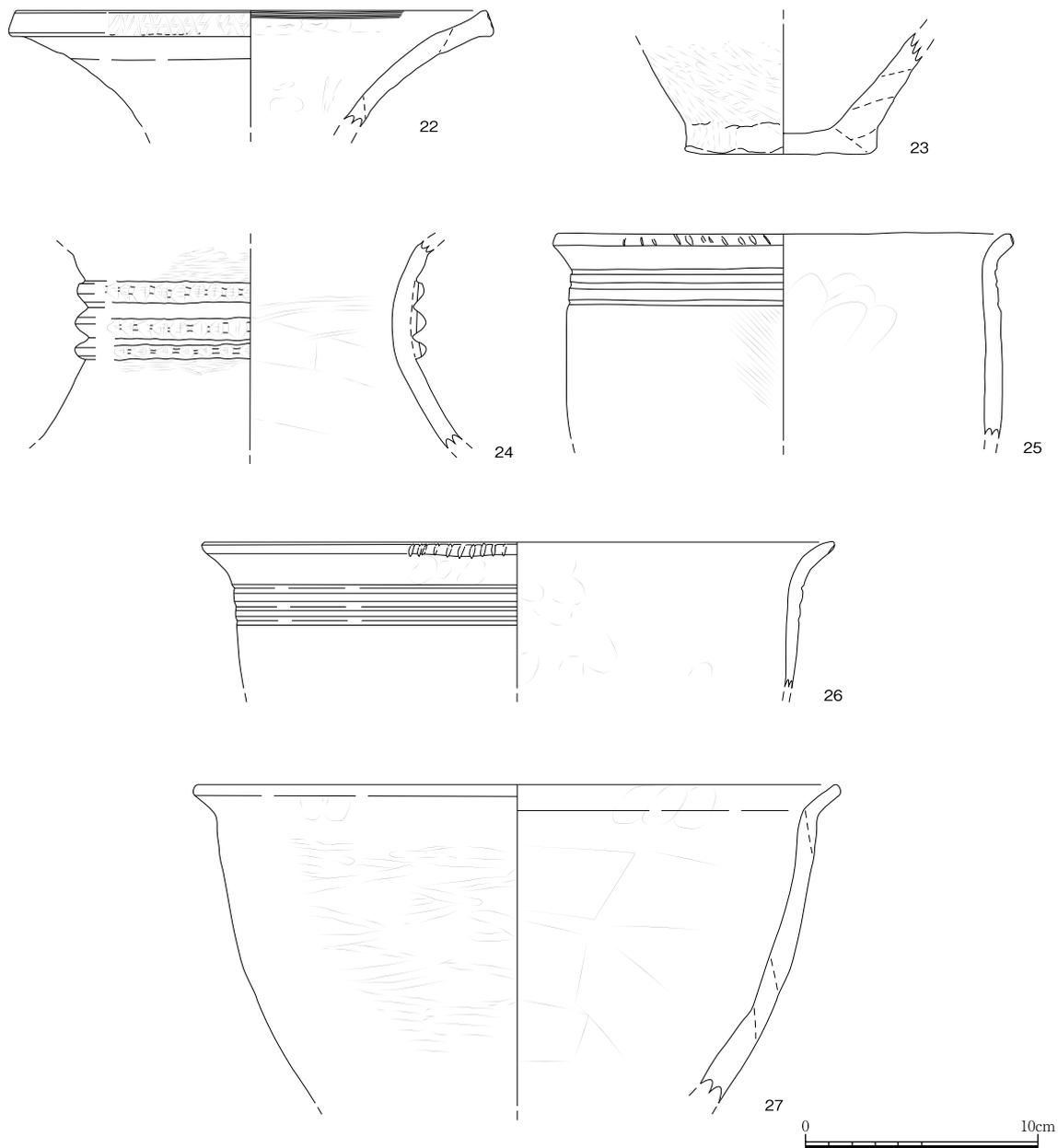


図14 出土遺物 2 (S = 1/3)

る。(16)は土師器の小型鉢である。内外面共にユビオサエの痕跡が多く残るが、外面底部付近は面取りのケズリ調整が施される。

(17～21)は、遺構が埋没する際に混入したと思われる弥生土器である。(17)、(18)は広口壺の口縁部で、体部は球形に近いものと想定される。(17)は、内面に粘土紐接合の痕跡が残るが、全体的に作りが精緻である。(18)は体部に記号が入る。(19)は小型の甕の口縁である。これらの弥生土器は、大和VI-1～2様式の時期に相当するものと思われる。¹⁾

図14(22)はSK-208出土で、篋描斜格子文と櫛描直線文で飾られる。頸部のしまる、細長い形態の広口壺の口縁部であると考えられる。図14(23～27)は第1遺構面のベースとなっていた包含層出土の土器である。(24)は広口壺頸部で、ハケメ原体による刻みの施された突帯が3条巡る。(25)と(26)

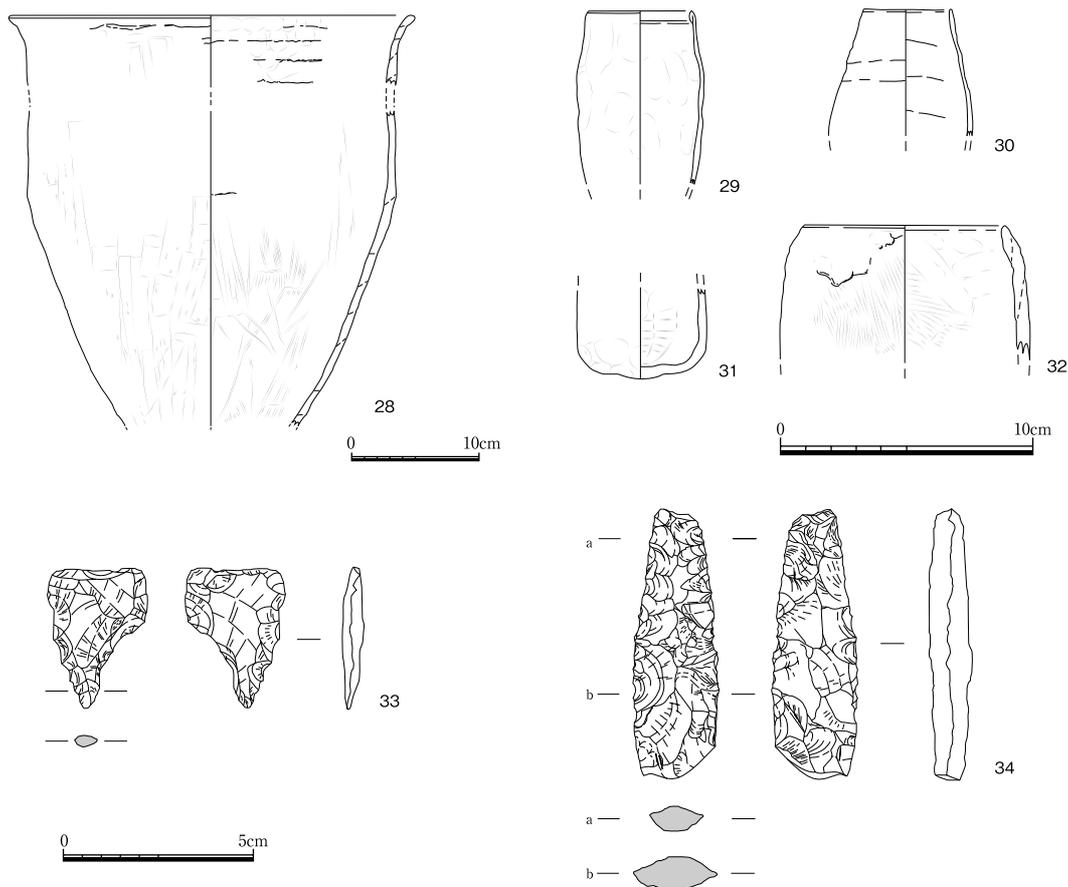


図15 出土遺物 3 (28 : S = 1/6、29~32 : S = 1/3、33・34 : S = 1/2)

は口縁端面に刻み目のある甕で、釣鐘状の形態のものと思われる。(27)は無文の鉢である。いずれも、大和Ⅰ-2~Ⅱ-1様式に相当するものと判断できる。

図15(28)は、縄文時代晩期の無文の深鉢である。緩い段を持って口縁が外反する形状を呈す。口縁付近は粘土紐の接合痕跡が明瞭に残り、全体的に1~2cm幅の粘土紐を積上げ成形したものと判断できる。内面には、条線を持つ工具を用いてナデ調整を施している。

製塩土器 図15(29~32)は製塩土器である。いずれも細かな破片の状態で見つかり、図化に耐えるものは少数であった。(29~31)はSX-104出土で、いずれも卵形の形態のものである。調整はナデやユビオサエが目立つが、(31)のみ内面に断続的な横方向のハケメが施される。(29)と(30)は、被熱しているようで、一部変色している。

石器 図15(33, 34)は打製石器である。2点の製品が見つかったが、いずれも遺構に伴うものではなく、包含層中に混入する形であった。(33)は石錐で、SX-101周辺で見つかった。肉眼で観察できるような使用痕は見られなかった。(34)は中型の尖頭器である。先端と基部を欠失し、表面はやや風化している。いずれもサヌカイト製である。先述どおり、包含層中からは、多数のサヌカイト剥片が見つかっており、石器製作自体は調査地の近辺でも実施されていたものと考えられる。

5. まとめ

調査成果から、調査地付近には古墳時代中期頃（5世紀後半以降）の遺構があったこと、小規模とはいえ、方位に乗った掘立柱建物が存在したことが想定される。なお、古墳時代後期以降と積極的に判断できる遺構は検出されず、第15次調査で検出した遺構群との関連は不明であるが、人為的に埋め戻されたと判断できる遺構が多数存在することから、古墳時代中期以降に整地のような作業が行われていた可能性がある。

古墳時代中期以降の遺構面の下には弥生時代前期～縄文時代晩期に遡る包含層と遺構面が存在していたことがわかった。

(杉山)

〈参考文献〉

清水真一1988「脇本遺跡」『大和の考古学50年』学生社

井上主税2010「脇本遺跡第15次調査」『奈良県遺跡調査概報2009年』奈良県立橿原考古学研究所

光石鳴巳編2011『脇本遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所

岡田雅彦2013「6. 脇本遺跡（第18次調査）」『大和を掘る31～2012年度発掘調査速報展～』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

【註】

- 1) 大和弥生文化の会編2003『奈良県の弥生土器集成』

表 3-1 出土遺物一覧 (脇本遺跡第19次調査) ①

図番号	地区 層位	器種器形	法量	調整など	色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
図13-1	SP-105	土師器 壺	口径：23.6cm 残存高：9.4cm	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ケズリ	外面：10YR6/3 (にぶい、黄褐) ～10YR6/3 (にぶい、黄橙) 内面：5YR6/6 (橙)	やや粗	良好	口頸部 13%	
図13-2	SP-105	土師器 壺	最大径：20.6cm 残存高：5cm	外面：摩滅のため不明 内面：ナデ、ハケメ	外面：5YR5/6 (明赤褐) 内面：10YR6/4 (にぶい、黄橙) ～10YR5/2 (灰黄褐)	やや粗	良好	頸部 17%	
図13-3	SP-105	土師器 高杯	残存高：6.1cm	外面：ミガキ 内面：ナデ	外面：7.5YR6/6 (橙) 内面：5YR6/6 (橙)	密	良好	柱状部 100%	円形の穿孔3方向
図13-4	SP-105	土師器 甕	口径：11.4cm 残存高：2.4cm	ヨコナデ	外面：5YR6/6 (橙) 内面：5YR5/6 (明赤褐)	やや粗	良好	口縁 16%	
図13-5	SP-102	弥生土器 壺底部	底径：3.9cm 残存高：3cm	ユビオサエ、ナデ	外面：7.5YR6/6 (橙) ～5YR6/8 (橙) 内面：7.5YR6/6 (橙)	密	やや 軟質	底部 100%	
図13-6	SP-108	土師器 高杯	口径：19.8cm 残存高：5.5cm	外面：ハケメ 内面：摩滅のため不明	10YR6/4 (にぶい、黄褐)	密	良好	杯部 25%	
図13-7	SP-110	土師器 高杯	口径：16.6cm 残存高：5cm	外面：ナデ、ユビオサエ 内面：ナデ	5YR6/6 (橙)	密	軟質	杯部 40%	
図13-8	SX-101	須恵器 坏蓋	口径：約12.2cm 残存高：2cm	回転ヨコナデ	N7/0 (灰)	密	良好	5%	
図13-9	包含層	須恵器 甕	口径：23.2cm 残存高：5.2cm	回転ヨコナデ	外面：N6/0 (灰) 内面：N7/0 (灰白)	密	良好	口縁 10%	
図13-10	SX-104	須恵器 坏蓋	口径：11.4cm 残存高：3.4cm	外面：回転ヨコナデ、 回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	N6/0 (灰)	密	良好	13%	
図13-11	SX-104	須恵器 鉢	残存高：3.8cm	外面：カキメ、 回転ヨコナデ 内面：回転ヨコナデ	外面：N5/0 (灰) 内面：N5/0 (灰) ～N4/0 (灰)	密	良好	-	把手付き
図13-12	SX-104	須恵器 高坏	口径：16.4cm 残存高：5.5cm	外面：回転ヨコナデ、 回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	外面：N6/0 (灰) 内面：N5/0 (灰)	密	良好	杯部 25%	杯部波状文
図13-13	SX-104	須恵器 高坏	底径：8.8cm 残存高：11.2cm	外面：回転ヨコナデ、 回転ヘラケズリ 内面：回転ヨコナデ	外面：5Y5/2 (灰オリーブ) 内面：5Y6/1 (灰)	密	良好	25%	杯部波状文 長方形透し3方向

表3-2 出土遺物一覧(胎本遺跡第19次調査)②

図番号	地区 層位	器種器形	法量	調整など	色調	胎土	焼成	残存率(%)	備考
図13-14	SX-104	土師器 高杯	口径：15cm 残存高：4.9cm	外面：ヨコナデ、ケズリ 内面：ミガキ、ナデ	外面：7.5YR6/6(橙) 内面：5YR6/6(橙)	密	良好	杯部 10%	
図13-15	SX-104	土師器 高杯	口径：13.4cm 残存高：5cm	外面：ナデ? 脚部付近ケズリ 内面：ナデ	5YR6/6(橙)	やや密	良好	杯部 33%	
図13-16	SX-104	土師器 鉢	口径：9.2cm 器高：7cm	外面：ヨコナデ、ユビオサエ、 底部付近ケズリ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	外面：7.5YR6/6(橙) 内面：7.5YR5/4(にぶい褐)	やや粗	良好	18%	
図13-17	SX-104	弥生土器 広口壺	口径：15.8cm 残存高：5cm	外面：ミガキ 内面：ミガキ	7.5YR5/4(にぶい褐)	密	良好	口頸部 25%	
図13-18	SX-104	弥生土器 広口壺	口径：13.0cm 残存高：5.6cm	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ユビオサエ	外面：10YR8/4(にぶい黄橙) ~2.5Y7/2(灰黄) 内面：10YR8/4(浅黄橙)	密	良好	口頸部 10%	体部にヘラ記号
図13-19	SX-104	土師器 甕	口径：9.8cm 残存高：3.7cm	ヨコナデ	外面：7.5YR5/6(明褐) 内面：7.5YR6/6(橙)	やや粗	良好	20%	
図13-20	SX-104	弥生土器 底部	底径：4cm 残存高：5cm	外面：ユビオサエ 内面：ハケメ	外面：7.5YR5/4(にぶい褐) 内面：7.5YR6/6(橙)	やや粗	良好	底部 100%	
図13-21	SX-104	弥生土器 底部	底径：3.9cm 残存高：5cm	外面：ユビオサエ 内面：摩擦のため不明	外面：7.5YR6/4(にぶい橙) 内面：7.5YR5/4(にぶい褐)	密	良好	底部 50%	
図14-22	SK-208	弥生土器 壺口縁	口径：20cm 残存高：5cm	外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ、ナデ	7.5YR5/4(にぶい褐)	密	良好	口縁 13%	
図14-23	包含層	弥生土器 底部	底径：7.9cm 残存高：5.6cm	外面：ミガキ 内面：摩擦のため不明	外面：10YR5/2(灰黄褐) 内面：10YR6/4(にぶい黄橙)	やや粗	良好	底部 100%	
図14-24	包含層	弥生土器 壺頸部	頸部径：13.8cm 残存高：8.1cm	外面：ミガキ 内面：ナデ、ミガキ	外面：10YR5/2(灰黄褐) 内面：10YR4/1(褐灰)	やや粗	良好	頸部 13%	頸部に三条の刻目突帯
図14-25	包含層	弥生土器 甕	口径：19.3cm 残存高：8.9cm	外面：ナデ、ハケメ 内面：ナデ、ユビオサエ	5YR5/6(明赤褐)	やや粗	良好	口縁 14%	口縁部に刻目体部に沈線
図14-26	包含層	弥生土器 甕	口径：26.8cm 残存高：6.3cm	外面：ナデ 内面：ナデ、ユビオサエ	外面：5YR5/6(明赤褐) 内面：5YR6/6(橙)	密	良好	口縁 10%	口縁部に刻目体部に沈線

表 3 - 3 出土遺物一覧 (胎本遺跡第19次調査) ③

図番号	地区 層位	器種器形	法量	調整など	色調	胎土	焼成	残存率 (%)	備考
図14-27	包含層	弥生土器 鉢	口径：27.6cm 残存高：13.7cm	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ、ユビオサエ	7.5Y5/4 (にぶい褐)	やや粗	良好	口縁 16%	
図15-28	包含層	縄文土器 深鉢	口径：31.6cm 残存高：約32cm	外面：ケズリ 内面：ナデ	外面：10YR3/1 (黒褐) ~ 10YR4/1 (褐灰) 内面：10YR4/2 (灰黄褐) ~ 10YR4/1 (褐灰)	やや粗	良好	約13%	
図15-29	SX-104	製塩土器	口径：4cm 残存高：6.9cm	ユビオサエ、ナデ	外面：2.5Y8/3 (浅黄) ~ 5YR7/4 (にぶい橙) 内面：2.5Y8/3 (浅黄)	密	良好	25%	
図15-30	SX-104	製塩土器	口径：3.4cm 残存高：5cm	ユビオサエ、ナデ	7.5Y7/4 (にぶい褐)	やや粗	良好	67%	
図15-31	SX-104	製塩土器	最大径：5.1cm 残存高：3.7cm	外面：ユビオサエ 内面：ユビオサエ、ハケメ	外面：7.5YR6/4 (にぶい橙) 内面：7.5YR5/4 (にぶい褐)	密	良好	底部 50%	
図15-32	包含層	製塩土器	口径：7.8cm 残存高：5.4cm	外面：ユビオサエ、ハケメ 内面：ナデ、ハケメ	外面：7.5YR6/6 (橙) 内面：7.5YR5/4 (にぶい褐)	やや粗	良好	13%	

第3節 纏向遺跡第175次発掘調査報告

1. はじめに

纏向遺跡は庄内式期から布留式期にかけての大規模な遺跡として知られ、近年は国家形成に関わる重要な遺跡として注目を集めている。桜井市北西部の大字太田・巻野内・辻・東田を中心に、東西約2km、南北約1.5kmにおよび、桜井市北東部より流れでる纏向川や烏田川の扇状地上に立地している。

纏向遺跡第175次調査は大字辻45番地の5において個人住宅の建設にともなう範囲確認調査としておこなった。本調査区は平成20年度より開始した辻地区の範囲確認調査地（纏向遺跡第162、166、168、170、173、176次）に西に接し、第176次調査1区から1段下がったところにある¹⁾。

本調査地の北に隣接する第21次調査では、東側に肩をもつ流路が確認されており、時期は不明ながらも東側の微高地の西限を画する南北溝のような遺構の可能性が指摘されていた²⁾。また、調査区の北西に接する第169次調査区では、庄内3式期以前に堆積し、縄文土器片が出土した西北西－東南東に走向する流路の北肩を検出している。

今回の調査では、一連の範囲確認調査地より西の遺構の様子を把握することと、21次で想定された南北溝の西肩の有無を確認すべく東西に2箇所トレンチを設定し調査をおこなった（図16）。調査区は西側を西区、東側を東区とした。西区は2.5×5m、東区は3×5mの計27.5㎡である（図17）。



図16 これまでの調査地の位置と地形

2. 調査の方法と基本層序

調査前まで調査地は駐車場であったため、まず重機により盛土とその直下の耕作土、床土を除去した。西区では床土の下に素掘り溝の基盤となる旧耕作土があり、その下は全面が砂層となる。砂層から下は湧水が著しい。さらに掘り下げると拳大の礫を含む砂層となる。東区では、床土の下は全面に包含層が広がり、包含層の上から遺構が掘り込まれていた。包含層の下には地山となる黄褐色シルト層が広がる。黄褐色シルト層の下には砂層が広がっていた。

3. 調査の成果

西区 西区では全面で流路を検出した。流路は上層と下層に大別できる。上層は東へと下る斜堆積となっている。上層に多く土器が含まれていた。下層は多量の礫を含む層で、遺物のごく少量出土する。調査区の面積が狭い上、湧水が激しかったことから、旧流路の底まで掘削できず下層を20cm掘り下げて調査を終了した。

第21次調査、第169次調査の流路堆積状況と第175次西区の流路を比較すると、流路の上端レベルは第169次が72.7m、第175次が72.9mである。第169次調査の流路は上面から庄内3式期の遺構（SK-1001）が掘り込まれており、流路自体庄内3式期以前と考えられる³⁾。上限は出土した縄文時代後期の土器片からそれ以降と考えられる。一方後述するように第175次調査西区流路上層では布留式期を下限とする土器を含み、同一の流路とは考えにくい。

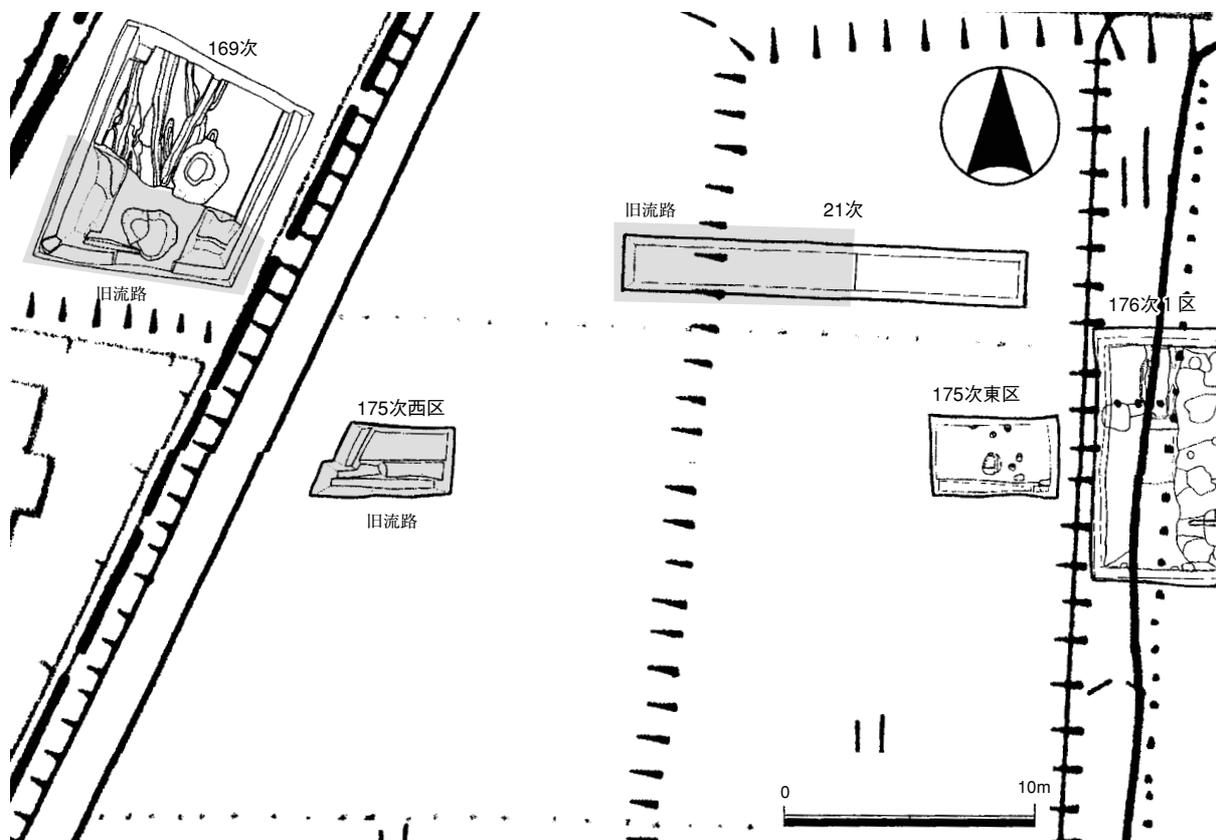


図17 調査区の位置 (S=1/300)

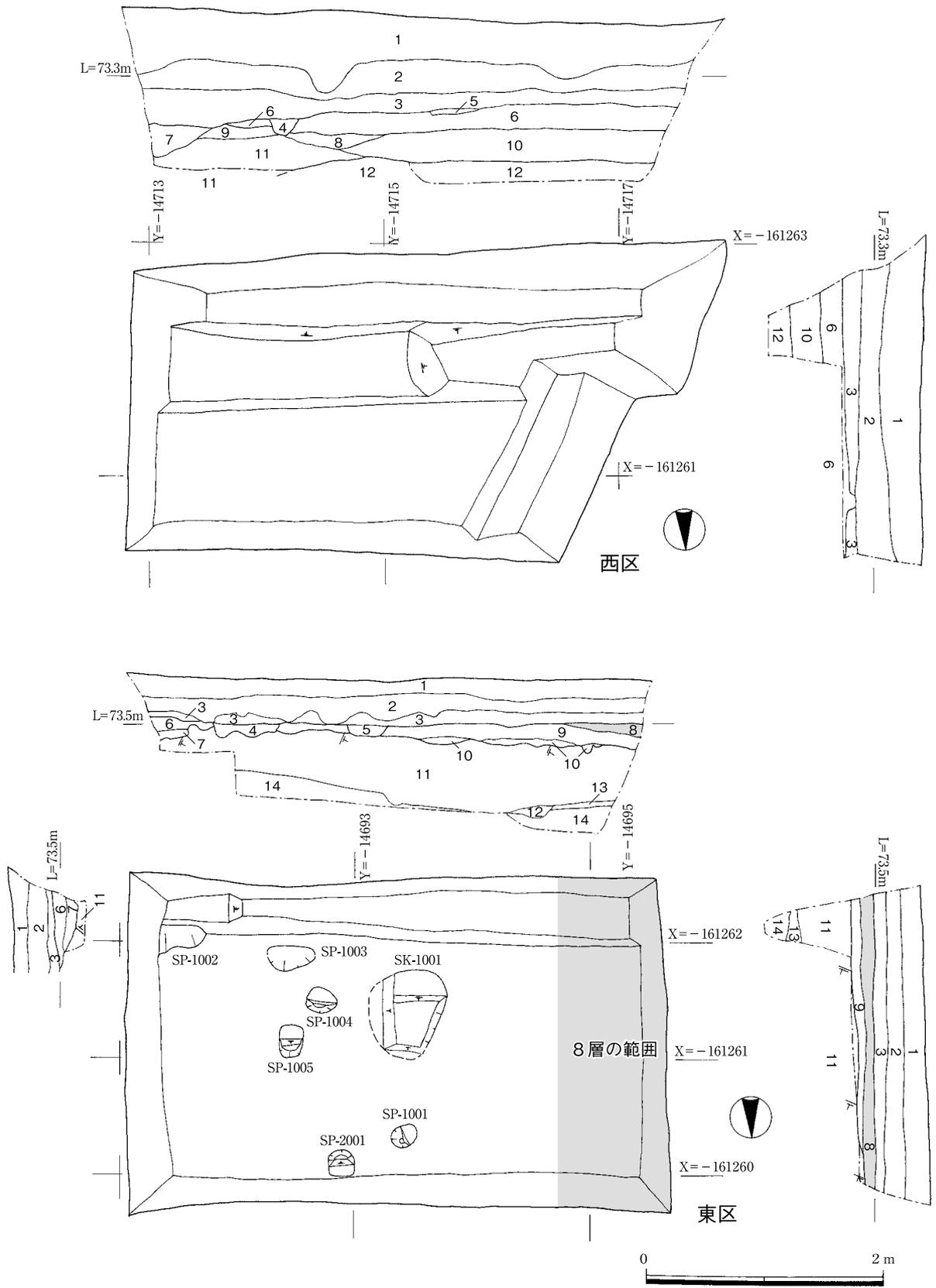


図18 調査区 平面・断面図 (S=1/50)

表4 土層註記一覧（纏向遺跡第175次調査）

番号	土色・土質	性格	番号	土色・土質	性格
西区			東区		
1		現代盛土	1		現代盛土
2	7.5GY 4 / 1 暗緑灰色 細粒砂	現代耕土	2	N 4 / 0 灰色 細粒砂	現代耕土
3	7.5Y 4 / 1 灰色 細粒砂	床土	3	7.5Y 5 / 2 灰オリーブ色 細粒砂	床土
4	7.5Y 3 / 1 オリーブ黒色 細粒砂	素掘り溝	4・5	7.5Y 5 / 1 灰色 細粒砂	素掘り溝
5	7.5Y 4 / 1 灰色 細粒砂 マンガン沈着	素掘り溝	6	10Y 3 / 1 オリーブ黒色 細粒砂	SP-1002埋土
6	5 Y 3 / 2 オリーブ黒色 細粒砂	旧耕土	7	10Y 3 / 1 オリーブ黒色 細粒砂 地山ブロックを多く含む	SP-1002埋土
7	7.5Y 6 / 1 灰色 極細粒砂～細粒砂	旧流路上層	8	5Y 5 / 2 灰オリーブ色 極細粒砂	包含層
8	7.5YR 4 / 3 褐色 細粒砂	旧流路上層	9	7.5Y 4 / 1 灰オリーブ色	包含層
9	10Y 5 / 1 灰色 細粒砂 径1cm以下の礫を含む	旧流路上層	10	2.5Y 4 / 1 黄灰色 細粒砂シルトブロックを含む	包含層
10	7.5Y 5 / 1 灰色 中～細粒砂 径3cm以下の礫を含む 土器が多い	旧流路上層	11	5Y 5 / 3 黄褐色 シルト	地山
11	5 Y 8 / 3 淡灰色 中～細粒砂	旧流路上層	12	5Y 5 / 2 暗灰黄色 粘土	地山
12	2.5Y 4 / 1 黄灰色 中粒砂 20cm以下の石を含む	旧流路下層	13	5Y 4 / 2 暗灰黄色 細粒砂	地山
			14	7.5Y 5 / 1 灰色中粒砂 径5cm以下の石を含む	地山

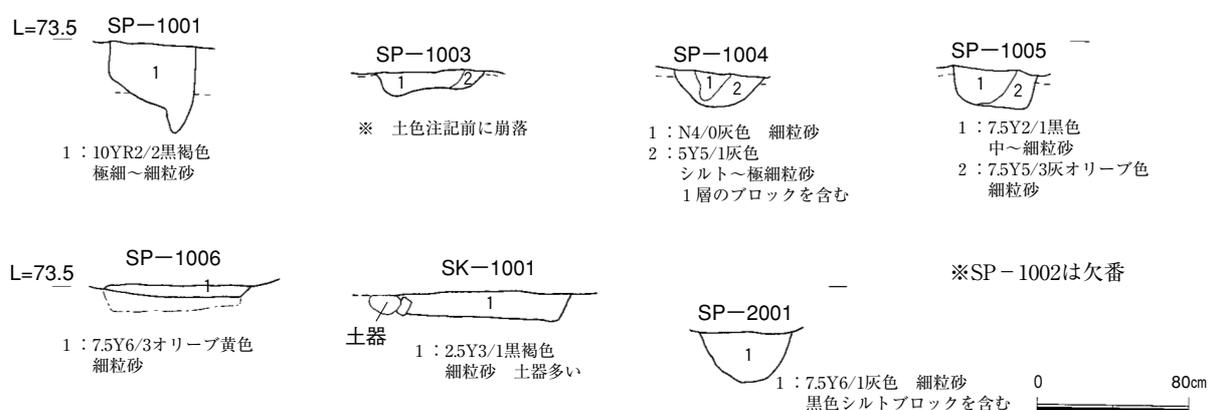


図19 東区の遺構断面図（S=1/40）

第21次調査では、東から西に斜堆積をもつ流路とその東肩が確認されている（図17）。流路内砂礫層からは縄文後期かとされる土器片が出土しているものの、流路自体の時期は不明である。この流路は第175次調査区よりもさらに北西側にあり、第169次流路北肩を曲げなければ同一の流路とはしにくい。よって第21次流路と、第169次流路は別の流路と捉えるべきであろう。第175次上層と第21次流路は堆積方向が逆であり、第175次調査西区の旧流路上層の斜堆積は、第21次調査で検出した流路の逆の上がりの一部を捉えている可能性が考えられる。位置関係を見ても、両者が同一の流路の可能性が高い。

ただし、第176次調査2区、3区では第175次調査の約30m南側を調査したものの、流路の延長にあたるような遺構は検出できていない。このことから、第21次・第175次で検出した流路は真南に流れるのではなく、南東方向に流れるか、途中で止まるものと考えられる。

東区 東区は、上から現代盛土、現代水田土、床土、包含層、黄褐色シルト、砂層からなる。包含層上面と地山上面で遺構検出を行った。包含層上面ではピットや土坑を検出した。確実に地山上面から掘削されたといえる遺構はない。また砂層から縄文土器片が出土している。

SP-1001は東区中央に掘り込まれたピットで、底部がとがる。深さ23cmをはかる。SP-1002は南側

の側溝にかかる遺構で、調査区外に伸びる。深さは20cmをはかる。SK-1001は調査区の中央に掘り込まれた土坑で、遺構の東側と北側は後世の素掘り溝によって壊される。直径約70cmをはかる。庄内式期新相～布留0式期の幅に収まるものと考えられる。地山上面ではSP-2001を検出したが、これは埋土や形態が包含層上面から掘られたSP-1004と類似しており、包含層上面から掘り込まれていた可能性がある。

東に近接する第176次調査1区地山上面のレベルは、第175次調査では標高73.3～73.5mであるのに対して、1区西端では73.5mであり段差は認められず、ゆるやかに西に下る地形が復元できる。しかし、第176次調査で層厚40cm程度を確認している包含層は、第175次調査地では15cm程度となっている。これは、間に存在する段差の造成によって包含層がカットされた可能性がある。SK-1001が庄内式期新相～布留0式期の遺構であるので、包含層はその時期以前に形成されたと考えられ、カットされた時期も庄内式期新相～布留0式期以降の可能性が高い。

また、東区の南約30mにある第176次調査3区では、微高地を区画する布留2式期の東西溝が北に折れて延伸することが確認されている。第175次東区はその区画溝の東肩の延長上に当たるが、発掘調査中は認識することができなかった。ただし8層が区画溝埋土である可能性がある。8層は包含層の上部で、厚さ約10cmとごく浅い。包含層の下部と比べ保水性がよく、常に湿った状態にあり、調査中は包含層内の堆積の違いと認識していた。仮に8層が区画溝埋土の一部であるとすれば、区画溝はさらに北に延伸することとなり、微高地の北側を除く三方を囲む形状が復元できる。

現状では第176次調査1区と、第175次調査地の間には約1.4mの高低差がある。今回の調査でこの高低差が布留0式期以降の造作と考えることができた。また、布留2式期の区画溝が175次調査地を通るならば、この段差の形成も布留2式以降に限定できる。また、第176次調査1区東端では幅約1.3mの南北溝が検出されており、こういった区画が踏襲されて現況の段差が形成された可能性がある。

4. 出土遺物

(1)～(11)は西区出土の遺物である。(1)～(11)は流路出土の土器である。このうち(1)～(6)は流路の上下層が認識しないうちに取り上げた。(1)、(2)は大和形庄内形甕である。(3)の甕は外面を強くナデて段差が形成されている。布留形甕である。頸部に接合面が残る。(4)は小型丸底壺で、外面はヨコミガキ、口縁部内面はナナメ方向のハケメの後ヨコミガキ調整される。(5)は低脚高杯で、ヨコミガキが施される。(6)は二重口縁壺である。内面はユビオサエで調整する。(7)、(8)は旧流路上層出土の甕で、両者ともやや上げ底で左上がりの連続ラセンタキが施される。(9)の高杯は外面をタテミガキし、杯部との接合部に刻みが施されている。(10)、(11)は下層出土土器で、(10)は有段高杯の杯部である。内外面共に丁寧なミガキ調整がなされ、内面には右上がりの暗文が施される。(11)は庄内形甕の口縁部と考えられる。(3)からみて、流路の埋没が布留式期に下ることは確実であるが、流路の形成時期は不明である。いずれの遺物も摩滅しておらず遠方から運ばれていないと考える。

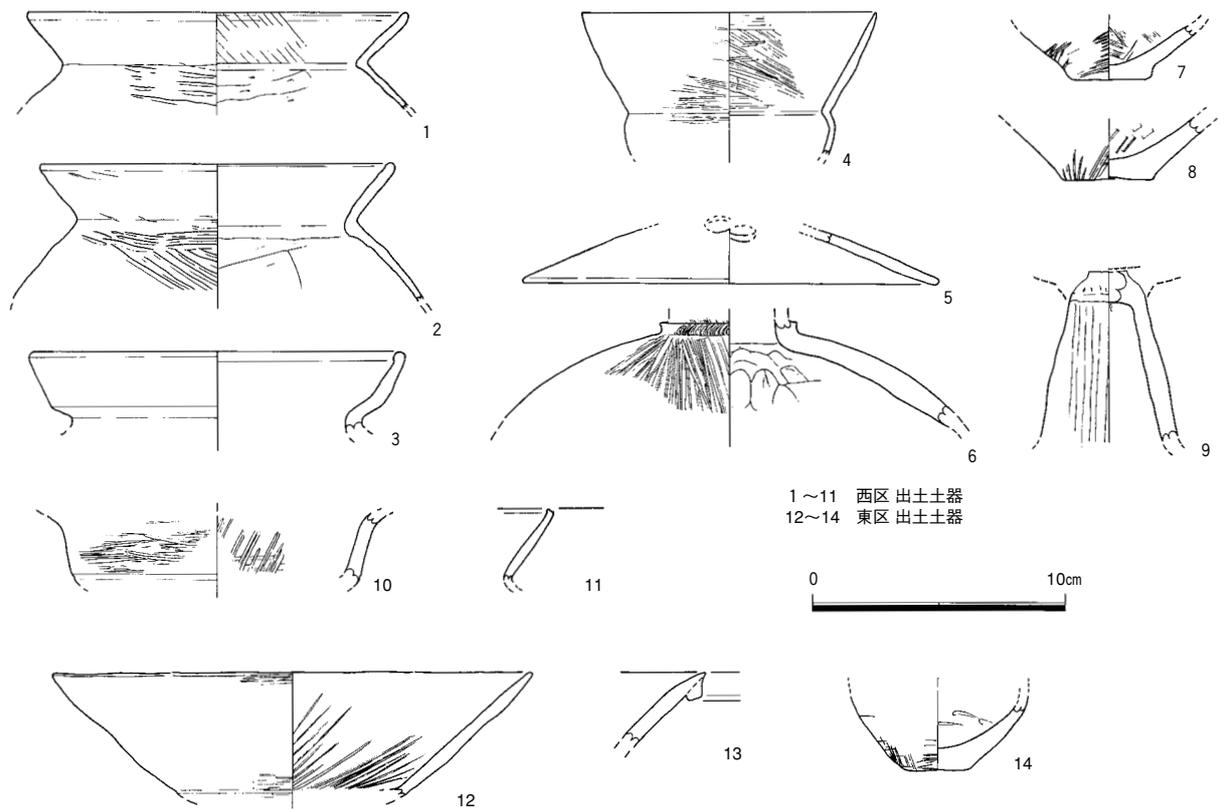


図20 調査区出土土器 (S=1/3)

(12) ~ (14) は東区のSK-1001出土遺物である。(12) は高杯で、外面の調整はほとんど分からないが、わずかにヨコミガキの痕跡が残る。内面はナデののち右上がりの暗文が施される。(13) は広口壺の口縁部である。口唇の外側に粘土紐を貼り付け肥厚させている。胎土は白褐色を呈する。(14) は小型の甕で、外面にタタキが施される。ただし連続ラセンタタキとならない。やや上げ底を呈する。遺物の量が少ないため時期は幅を持たざるを得ないが、SK-1001は庄内式期新相~布留0式期の幅に収まるものと考えられる。

5. まとめ

今回の調査では、西区では第21次調査で検出した流路の延長と考えられる流路を検出した。また、東区では顕著な遺構は認められなかったものの、周辺の調査の知見と合わせ、現状で認められる段差が古墳時代以降に形成された可能性が高いものと考えた。隣接する庄内式期の建物群の周辺環境を探り、地形の改変過程を考える上で、重要な調査となったと言えよう。

(森)

表5 出土土器一覧（纏向遺跡第175次調査）

図番号	出土位置・層位	胎土・色調	焼成	法量			調整
				口径	底径	器高（残存高）	
図20-1	西区 流路	黄灰褐色	良好	15.0	-	(3.7)	外 口縁部ナデ 体部タタキ 内 口縁部ハケメ→ナデ 体部ケズリ
図20-2	西区 流路	黄褐色	良好	14.0	-	(5.4)	外 口縁部タタキ→ナデ 体部タタキ 内 口縁部ナデ 体部ケズリ
図20-3	西区 流路	乳白色	軟質	14.4	-	(3.1)	外 ナデ 内 ナデ
図20-4	西区 流路	赤褐色	良好	11.6	-	(5.7)	外 口縁部ナデ→ミガキ 体部ケズリ→ミガキ 内 口縁部ハケメ→ミガキ 体部ナデ
図20-5	西区 流路	赤褐色	良好	-	16.6	(2.1)	外ナデ→ミガキ 内ナデ→ミガキ
図20-6	西区 流路	黄褐色（内面黒色）	良好	-	-	(4.3)	外ミガキ 頸部突帯 内ナデ
図20-7	西区西拡張 流路	黄灰褐色	良好	-	3.4	2.2	外 タタキ 内 ハケメ
図20-8	西区西拡張 流路	黄褐色	良好	-	3.7	3.5	外タタキ 内板ナデ
図20-9	西区西拡張 流路	赤褐色	良好	-	-	6.8	外 ミガキ 内 ナデ
図20-10	西区 流路	赤褐色	良好	-	-	(2.8)	外ナデ→ミガキ 内ナデ→ミガキ
図20-11	西区西拡張 流路	白褐色	良好	-	-	2.7	外 ナデ 内 ナデ
図20-12	東区 SK-1001	橙褐色	良好	18.9	-	(4.9)	外 ナデ 内 ナデ→ミガキ
図20-13	東区 SK-1001	白褐色	良好	-	-	(2.9)	外 ナデ 内 ナデ
図20-14	東区 SK-1001	黄褐色	良好	-	2.8	(2.9)	外 タタキ 内 ナデ

【註】

- 1) 橋本輝彦2013『纏向遺跡発掘調査概報 トリイノ前地区の調査』桜井市纏向学研究センター編 桜井市教育委員会
- 2) 久野邦夫・寺澤薫1979「桜井市纏向遺跡発掘調査概報-昭和53年度-」『奈良県遺跡調査概報1978年度』奈良県立橿原考古学研究所編
- 3) 丹羽恵二2012「纏向遺跡第169次調査」『平成22年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
- 4) 註1)

第4節 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳測量調査報告

1. はじめに

小川塚西古墳、小川塚東古墳、サシコマ古墳は桜井市北部に広がる纏向古墳群に所属する古墳である(図21)。纏向古墳群は古墳時代の開始を語るうえで重要な古墳群であるが、未だ時期や墳形が未確定な古墳も数多く、今回測量調査を実施することとした。

今回測量調査を行った三古墳はすでに天理大学考古学研究会によって測量調査と電気探査が行われ、小川塚西古墳については方墳であると指摘されている¹⁾(図22)。しかし天理大学考古学研究会の測量調査は国土座標上に位置づけられておらず、今後周辺古墳の調査を継続していく上では不便な点があった。そのため今回新たに測量調査を行い、国土座標に位置づける作業をおこなった。

また、三古墳については発掘調査はなされていないものの、天理大学歴史研究会のほか、いくつかの文献に既に報告・記述がなされている。古くは明治時代には野淵龍潜氏により報告がなされ、絵図が残されている²⁾(図23)。また、天理大学歴史研究会の報告を受け、寺澤薫氏と橋本輝彦氏は小川塚東古墳について1978年、1980・1981年当時の踏査の報告と墳形復元について新たな見解を披瀝している³⁾。



1. 巻野内石塚古墳
2. 石田古墳
3. サシコマ古墳
4. 小川塚西古墳
5. 小川塚東古墳
6. 池田1号墳
7. 池田2号墳
8. 平塚古墳
9. 小川塚古墳
10. 石塚古墳
11. 茶ノ木塚古墳
12. 北口塚古墳
13. 堂ノ後古墳
14. ホケノ山古墳
15. 宮ノ前古墳
16. 慶雲寺裏円墳
17. 慶雲寺裏古墳

図21 古墳の位置 (S=1/4000)

2. 周辺の地形と測量調査の成果

小川塚西古墳、小川塚東古墳、サシコマ古墳の周辺には巻野内石塚古墳、北口塚古墳、茶ノ木塚古墳、平塚古墳、慶雲寺裏古墳、ホケノ山古墳、堂ノ後古墳、宮ノ前古墳など複数の古墳が認められる。その他、消滅した古墳として池田1号墳、2号墳、神上塚古墳などが報告されている⁴⁾。また、周辺には「ジャカロ塚、ツカアイ」といった小字が認められ、さらなる埋没古墳があることも予想される。これらの古墳は大和高原より流れ出る纏向川の扇状地に立地している。扇状地は現在でも旧流路を読み取ることができ、旧地形を復元することが出来る。

小川塚西古墳 小川塚西古墳（以下、西古墳）は現況で果樹が植えられている。東西38.4m、南北33.4m、比高差5.4mをはかる。野淵氏の記録では「高三間、根廻六十八間」とされ、現況の大きさとほぼ変わらない。ただし明治時代には畑として利用されており現況と土地利用が異なっている。現在墳丘上には崩れた石垣が帯状に取り巻いており、これが野淵氏の図には認められないことから、天理大学歴史研究会では明治期以降の築造の可能性を推定しているが、こういった土地利用の変化が反映しているのかもしれない。

天理大学歴史研究会の電気探査では周溝を捉えており、一辺約41mの方墳に幅9～12mの周溝が取りまき、周溝の北西隅から排水される形態を復元している。測量図上では円墳か方墳であるかの判断はつかないが、墳丘の西・北側は切り立っており、墳丘裾が削り込まれていることが見て取れる。

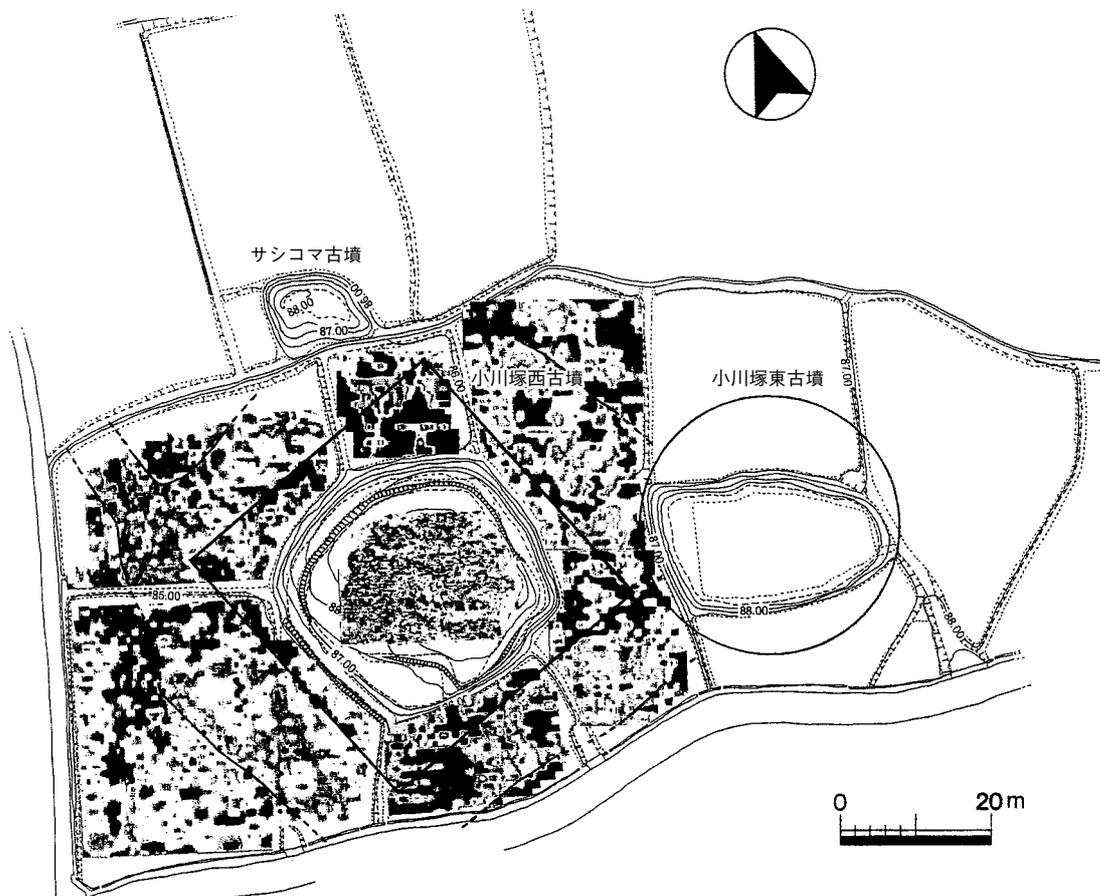


図22 天理大学歴史研究会による測量 (S=1/1000) (註7文献を改変)

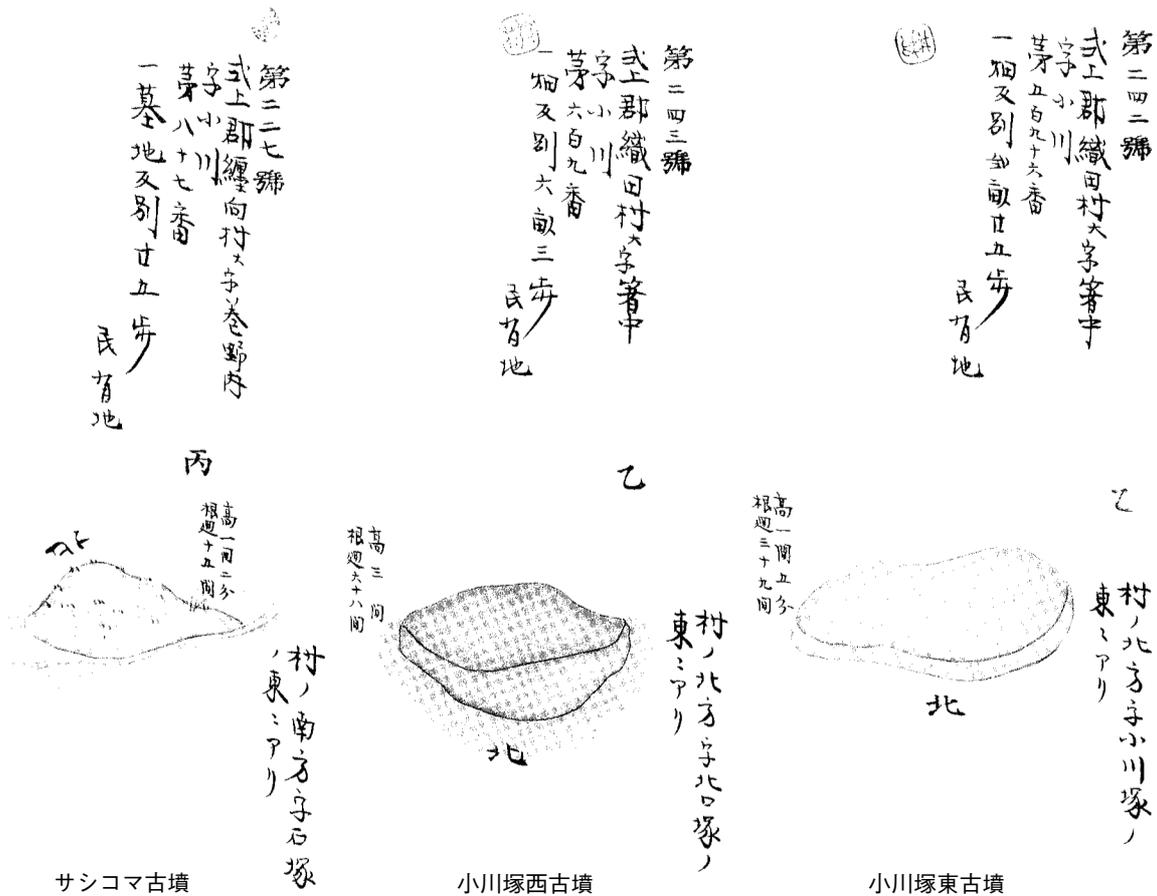


図23 野淵龍潜による報告（註2文献より転載）

ところで、西古墳の南側の農道の南を通る田の畦は86.0mの等高線で農道にそって東へ曲がっており、かつ86.8m付近でも同じく農道にそって大きく曲がっている。これは地形の形状から見て、小川塚東古墳の東約210mで調査した纏向遺跡第136次調査で検出した流路の南岸にあたり⁵⁾（図21）、西古墳は流路の埋没後に築かれているといえる。第136次調査で検出した流路は布留0式期に埋没したものであり、西古墳の築造時期も布留0式期を下るものと考えられる。

小川塚東古墳 小川塚東古墳（以下東古墳）は西古墳の東隣に位置する。現状では東西33.6m、南北19.4m、比高差2.5mをはかる東西に長い不整形となっている。この古墳復元については2通りの説がある。天理大学歴史研究会の復元では現状の最大幅からみて、径約34mの円墳となる可能性を示している。一方で、寺澤薫氏と橋本輝彦氏は、墳丘の南東部にのこる道路に取り込まれた小さな高まりを前方後円墳のくびれ部と考え、前方部を東南部に向けた全長約66mの墳形を復元している。

今一度精査すると、墳丘南側の田の畦は、墳丘の西面と等高線が一致しており、かつ87.0mの等高線が他の等高線と異なり墳丘南側で北西に張り出すため、本来は墳丘南側の田一面も墳丘の中に含まれていたと考えられる。また、寺澤・橋本両氏が想定したように南東側の高まりが墳丘の一部であると考えられる。農道拡幅以前の段階でも小さな高まりは既に存在しているため⁶⁾、この高まりも農道拡幅工事に伴って造成されたものではないことを示している。ただし、小さな高まりの南東側に墳丘が



図24 小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳平面図 (S=1/800)

調査範囲
 境界線

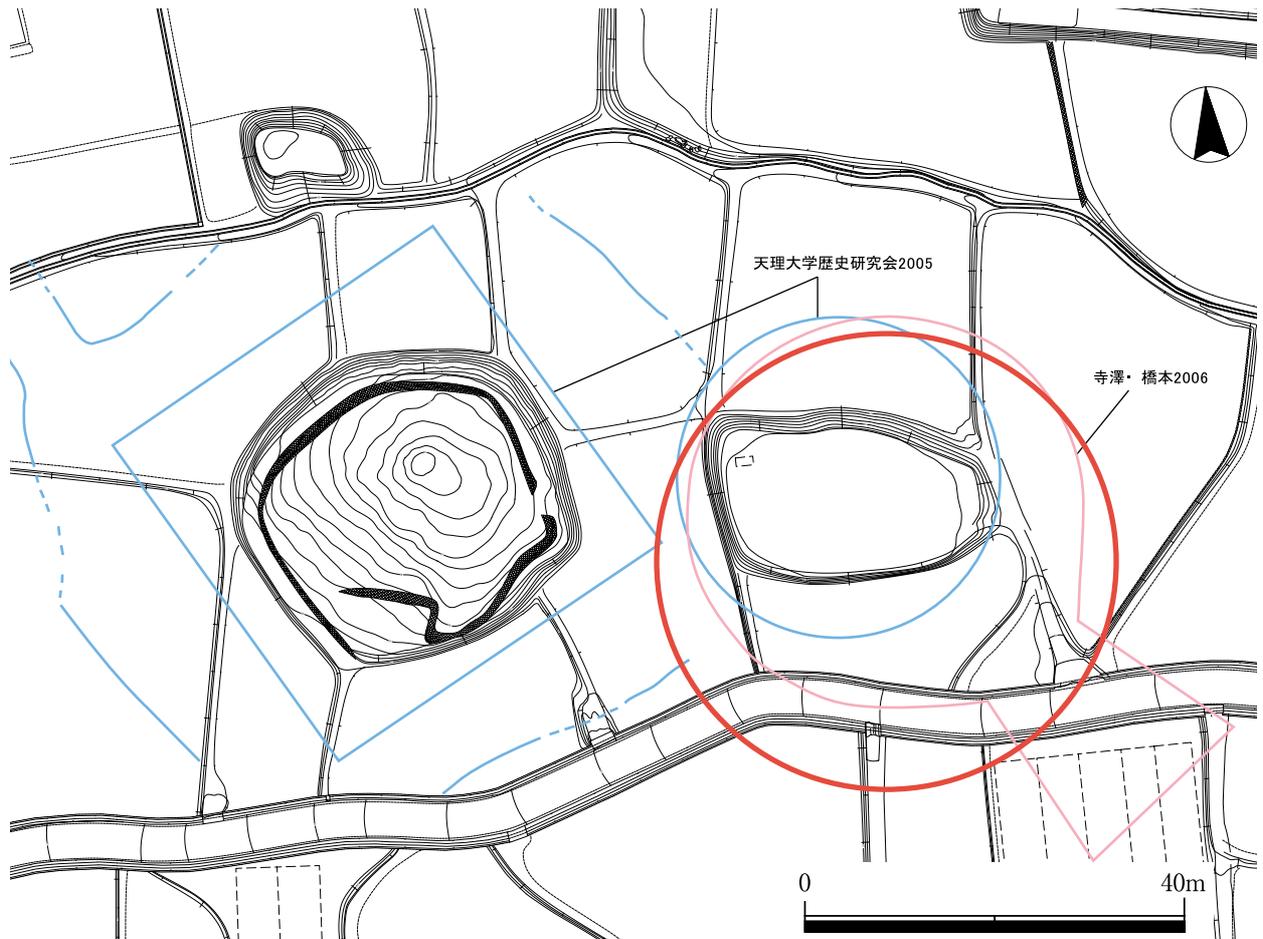


図25 墳丘の復元図 (S=1/800)

続き、前方後円墳となるかどうか不明である。仮に円墳とするならば、直径約48mに復元できる(図25の赤線)。この古墳も小川塚西古墳と同じく、墳丘の大半を埋没後の旧流路上に築造しているものと考えられるので、布留0式期以降の築造である可能性が高い。

サシコマ古墳 小川塚西古墳の北側に位置し、東西14.4m、南北11.0m、比高差2.6mをはかる。小川塚西古墳とは現況の墳端間で16.4mをはかる。サシコマ古墳については、「明治時代になるまでここに牛(死体・骨の両説がある)を埋めていたということである⁷⁾」との伝承もあり、古墳ではない可能性もある。野淵氏の報告でも小川塚東古墳や小川塚西古墳が畑として利用されているのに対して、「一墓地反別廿五歩 民有地⁸⁾」と、墓地としての利用を伝えていることや、現在でもサシコマ古墳は大宇区有の共有地となっていることは、こういった近世以前の土地利用を反映している可能性がある。

このように近世～近代には墓地としての利用がなされていたサシコマ古墳であるが、必ずしも古墳でないとも言い切れない。仮に古墳であると仮定すると、小川塚西古墳との間には旧流路があるが、サシコマ古墳による流路への張り出しは認められない。また、天理大学歴史研究会の電気探査でも小川塚西古墳の周溝に乱れがないことからサシコマ古墳は旧流路より北側に墳丘を持っていたものと考えられる。

その他 小川塚西古墳の北東側の畦28.8m地点で幅5m程の範囲に径1m大の石が散乱しているこ

とを確認した。この石材の散乱部分から北側は周囲よりも一段高くなっている。この周辺の小字名に塚原やツカアイがあり、この石材や高まりが埋没した古墳を反映している可能性もあろう。

3. まとめ

小川塚東古墳と小川塚西古墳については旧流路上に築造されているものと考えられ、周辺の調査成果から、布留0式期以降に築造されたものと考えた。旧流路のように周辺よりやや低くなった土地に墳丘を築造した例を見ると、周辺では箸墓古墳の周辺に築造された堂後古墳群が挙げられる。これらは周溝への取水を容易にするためであった可能性や、高燥地を他の古墳に先取され、より低湿な土地に築造せざるをえなかった可能性が考えられる。

小川塚東古墳の墳丘については、寺澤氏、橋本氏と同じく現況の墳丘の南側も墳丘に含まれるものと考えた。サシコマ古墳については、近世には牛を埋葬していたという天理大学歴史研究会の記述がその他の資料や現在の土地利用からも傍証しうると考えた。

(森)

【註】

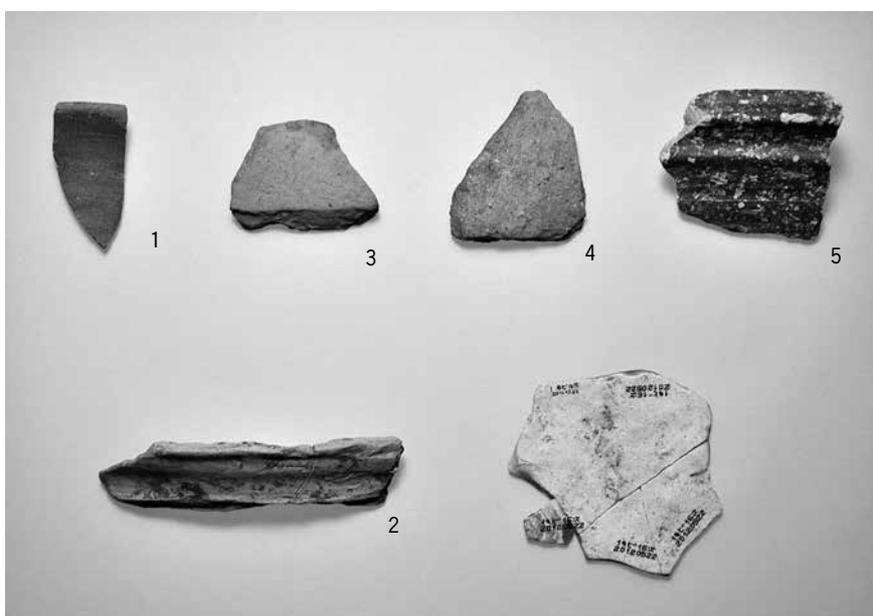
- 1) 天理大学歴史研究会2005「纏向古墳群(箸中支群)の調査」『布留』16号
- 2) 野淵龍潜1893『大和國古墳墓取調書』(野淵龍潜・秋山日出雄1985より)
- 3) 寺澤薫 橋本輝彦2006「纏向の小規模古墳群雑感－踏査記録のことなど－」『青陵』第120号
- 4) 桜井市役所1988『大三輪町史』(復刻版) 臨川書店
- 5) 福辻淳2004「纏向遺跡第136次調査報告」『桜井市平成15年度国庫補助による発掘調査報告書』
- 6) 奈良県立橿原考古学研究所編2001『大和の前期古墳 ホケノ山古墳調査概報』学生社 p.9
- 7) 註1)
- 8) 註2)



1 トレンチ（北東から）



2 トレンチ（北東から）



出土土器



第1遺構面（西から）
遺構検出状況



トレンチ南壁（東から）



SX-104断面（西から）



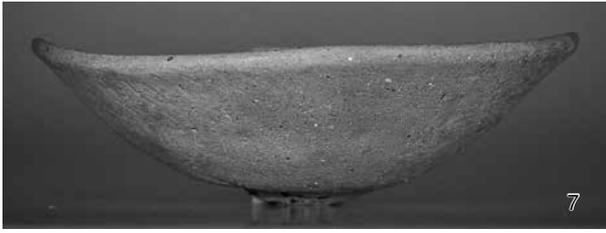
第1遺構面（東から）
遺構完掘状況



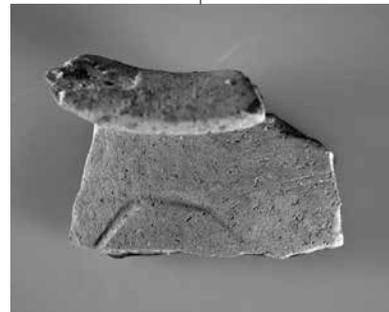
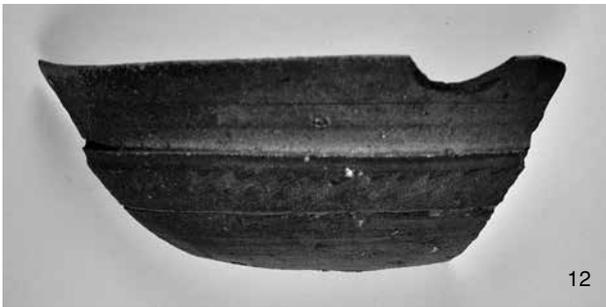
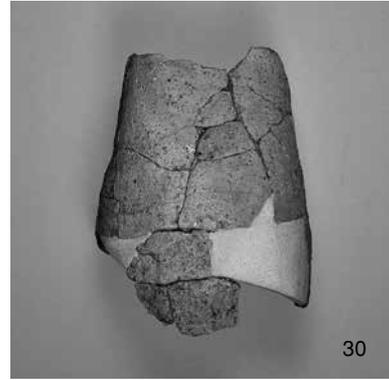
SX-101（南から）
遺構完掘状況



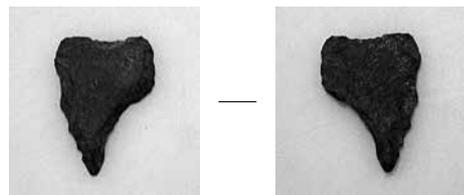
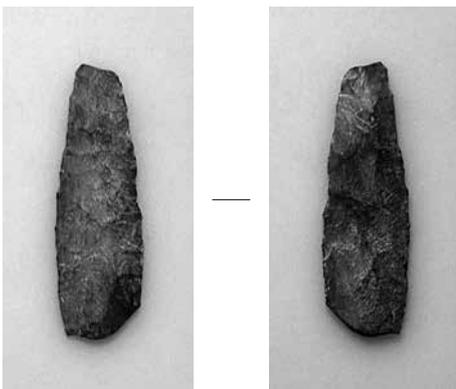
SX-303（北から）
遺物・礫検出状況



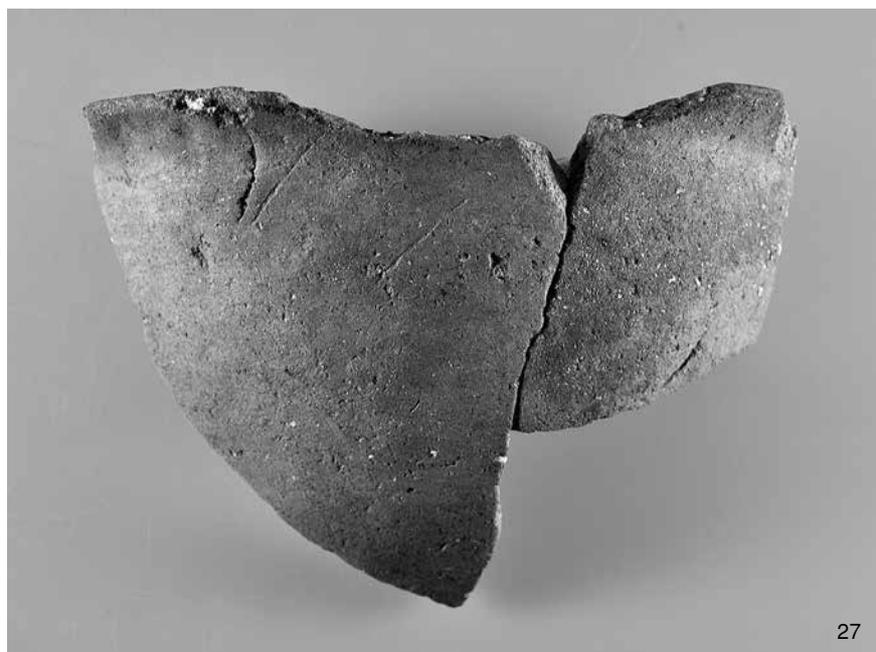
SP-110出土遺物



SX-104出土遺物



包含層出土の遺物①



27

包含層出土の遺物②



28

包含層出土の遺物③



西区全景（北東から）



西区南壁（北東から）



西区南壁拡張部（北から）



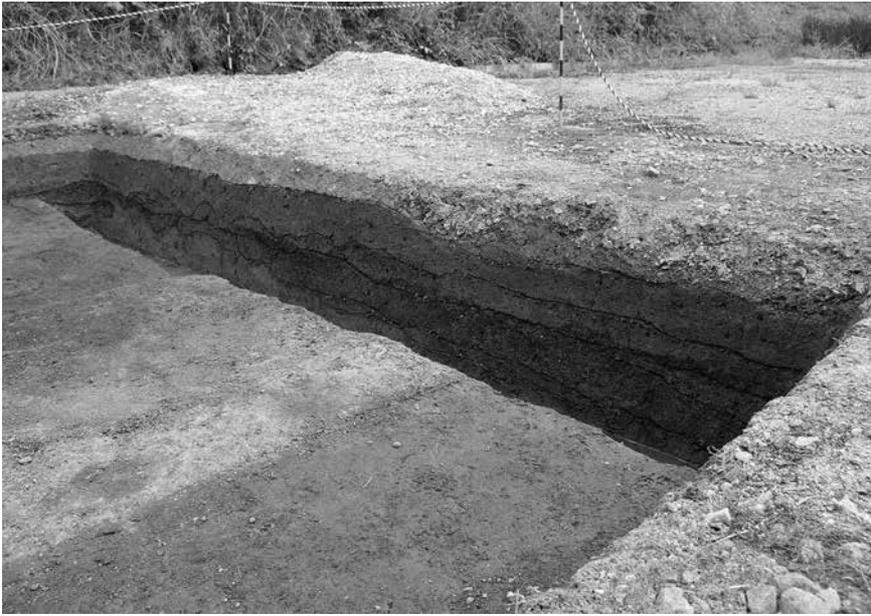
東区遺構検出状況①
(北西から)



東区遺構検出状況②
(南西から)



東区全景 (北西から)



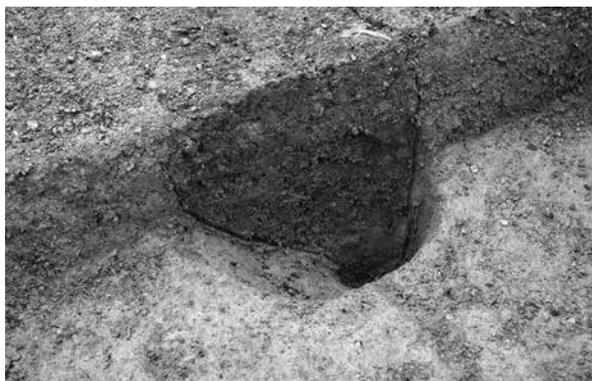
東区南壁（北西から）



西区作業風景



第176次調査区1区との段差
（南から）



SP-1001 (南東から)



SP-1002 (北西から)



SP-1003 (北から)



SP-1004 (北から)



SP-1005 (北から)



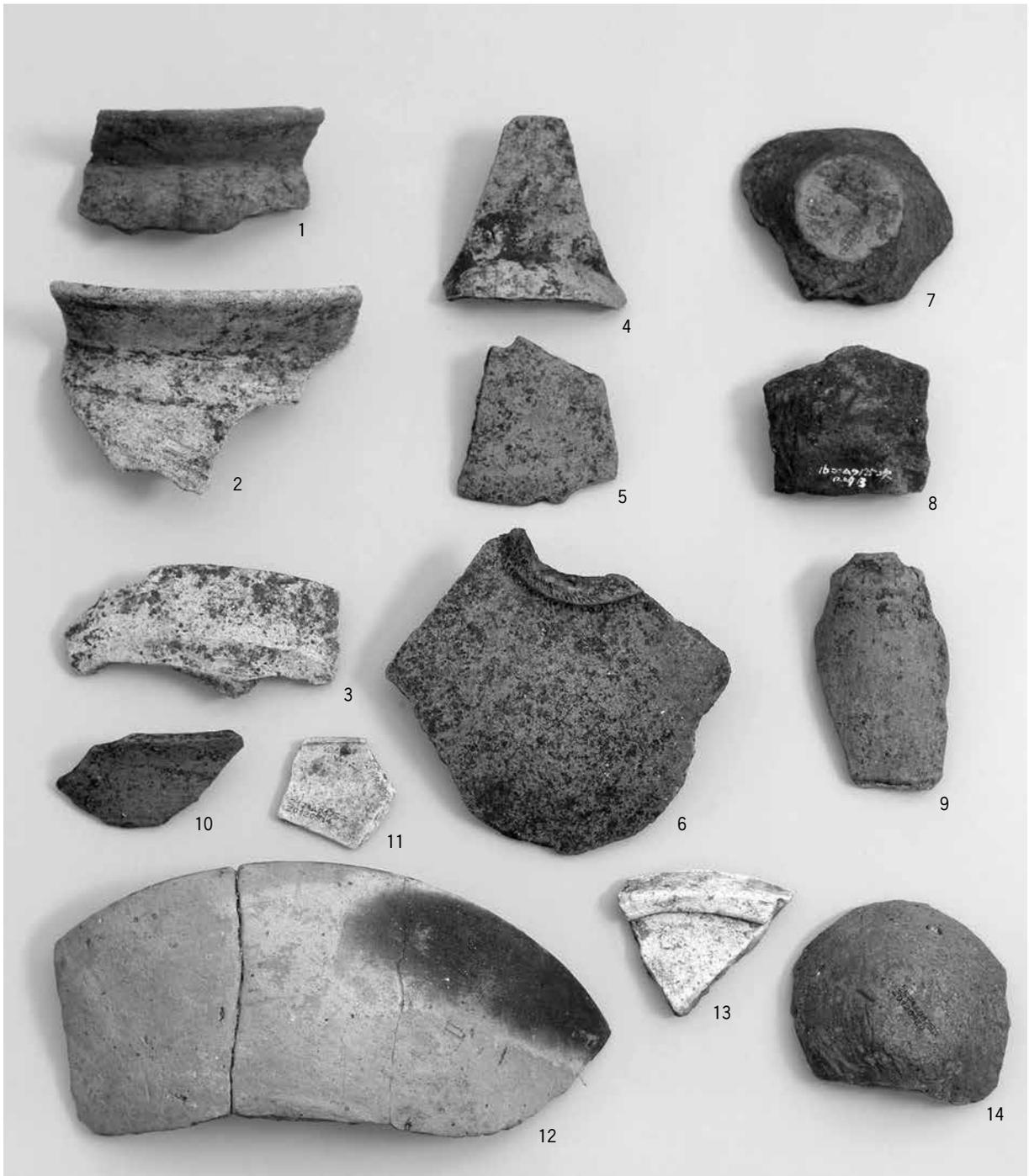
SP-1006 (北から)



SK-1001 (北から)



SP-1002 (南から)



1~11西区 12~14東区
調査区出土土器



小川塚西古墳・小川塚東古墳・サシコマ古墳全景（西から）



初釣り池周辺の石群

報告書抄録

書名	桜井市 平成24年度国庫補助による発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第41集
編著者名	森暢郎、杉山真由美（編集）
編集機関	桜井市教育委員会
所在地	〒633-0074 奈良県桜井市大字芝58-2 TEL0744-42-6005 FAX0744-42-1366
発行年月日	2014年3月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吉備遺跡第16次	桜井市 吉備481-4他	292061	14-B-22	34° 30'29"	135° 49'47"	20120518～ 20120523	21㎡	個人住宅の建設に伴う
脇本遺跡第19次	桜井市 黒崎622-1	292061	15-A-2	34° 31'17"	135° 52'33"	20120827～ 20121012	62㎡	農業用進入路の設置工事に先立つ
纏向遺跡第175次	辻45-5	292061	11-D-487	34° 32'46"	135° 50'23"	20120906～ 20120924	27.5㎡	個人住宅の建設に伴う
小川塚西古墳・ 小川塚東古墳・ サシコマ古墳	巻野内、 箸中地内	292061	11-D-664	34° 32'32"	135° 50'45"	20120327～ 20120328	—	

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉備遺跡第16次	集落遺跡	素掘溝	土器	
脇本遺跡第19次	集落遺跡	ピット、土坑	土器	
纏向遺跡第175次	集落遺跡	ピット	土器	
小川塚西古墳・小川塚東古墳・ サシコマ古墳測量調査	古墳	—	—	

桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書 第41集

桜井市
平成24年度国庫補助による
発掘調査報告書

発行 桜井市教育委員会
文化財課

〒633-0074 奈良県桜井市大字芝58-2番地

TEL 0744-42-6005

FAX 0744-42-1366

年月日 平成26年3月19日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3-464